

金井孤松君著

名山勝水

東京上田屋書店藏



名山勝水

孤松生稿

消夏日錄

有る所は斯作

嘗て願體集を讀みしに。曰く。喫一日之飯。宜計得一日之飯。錢必勿
 慮喫。今夏期休課數十日。乃ち宜しく遊息すべき者と云ふ。唯
 も斯數十の日を喫して海に山に苟も遊焉息焉す。豈に亦數十の
 日に當る者無くして可ならん。故是れ消夏日錄の作有る所以な
 り。然れ共余や才劣にして文尤も拙也。恐らくは一日の飯錢にす
 ら且つ當るとを得ざる可し。慚愧々々。己亥八月二日起筆す。是日
 先づ房の高崎に遊び留まると三旬餘。浴湖の爲めなが其地白沙

消夏日錄

一

高崎の海水
浴場

高崎の八景

二日 晴れて風静なり海上熨するが如く舟に簸颺掀翻の難無く人に
 瞑眩嘔吐の虞なし勝山に至りて漁船を辭し未牌に旅邸高崎亭に投
 ず亭は高崎の海岸青嶂海と相逼れる處に在り僻邑固より懸棟飛閣
 の壯雕欄翠壁の美無しと雖も波光欄に上りて鬱影直ちに軒を壓し
 而して土俗は則ち質朴主人は敦厚にして貪饕を憂ふるを須えず是
 れ最も快と謂はざる可けん哉意況暢然たり

三日 午前は雨亭の主人云ふ此地も亦八景有り往年東都の俳人某々
 等が來りしとき定めたる所なりと余因りて之を叩けば曰く岩井袋
 の歸帆曰く浮島山在勝の細雨曰く平島湖在村小の浮鷗曰く藥王寺の晚
 鐘同上曰く何曰く何曰く何と夫れ庸俗摸倣し而して八景の選天下其

八景は必ず
しと稱する
に足らず

高崎の全景

景色と民智

高崎の景勝

夥に勝えず平山凡水も猶ほ且つ往々其稱を冒す此地の選も亦豈に
 其類に非ざると無からんや然れども其全景に至りては前は則ち大
 海茫茫として豆相遙翠而して三崎相の岬と城ヶ島と一章相隔りた
 る處に芙蓉巍然として天半に聳え雲烟縹緲として氣象萬千更に顧
 みて右のかた久枝村を一瞥すれば松林葱々として延きて岩井袋の
 翠螺に及び而して富山犬即以馬穿八又蜿蜒として來りて其松間疎樹
 深簷の上に落つ亦一幅の好山水と謂はざる可からざる也余因て謂
 ふ管子に云へり民別而聽之則愚合而聽之則聖と斯理や豈に惟だ民
 のみならんやと午後村内の塋域を遍歴す其制異なる者少なからず

四日 間ま晴れて復た曇る此地の八景の選は昨の條に言ふ所の如し
 數必ずしも八ならず間暇に徐ろに之を定むるは亦我輩遊子の課か
 此日午後地の景勝を探り先づ二を獲たり其一は後に命じて海口の

晨眺と曰ふ者は是れ村端の一水俗に大川と稱するもの海に入る處に在り其一は大橋の海望と曰ふ大川の上流海口より大約四十間なるところに在り大橋といふも亦其本稱に非ず其大川に架するを以て今假りに之を名づけたる耳橋を過ぐれば即ち久枝村之を聞く久枝は舊と櫛に作れりと土人云ふ此れ實に橋媛の櫛の漂著したる處舊と櫛に作れる所以也と按ずるに上總國長柄郡本納村に橋神社といふ有り吾妻大明神と稱し橋媛を祀り亦云ふ其櫛の漂著したる處にして其櫛は當時陵を造りて之を納たりと史料通信叢誌に見ゆ余は史に暗し未だ知らず其孰れか果して實なるを但だ本納や九十九里濱の沿岸にして久枝は則ち東京灣口に在り當時の潮流果して何如而して久枝は古來皆な櫛の字を用ゐたりし耶本納の櫛果して當時の物なる耶斯三者を究め了りて斯に始めて得て斷ず可し

五日 夕陽を小浦の南岬に觀る藥王寺の背後なり始にして銀波閃々終りにして紅瀾數道惜ひかな日富嶽の右腹に沒して雲烟蔽遮し火盆烈々として紅光萬道朱般海を竟るの壯觀無し文家の夕陽海に映ずるを記する必ず曰朱般萬丈と我れ今にして其謬妄なるを知る也抑も夕陽に落日有り將に沒せんとする者なり然る後に海波朱般なり但だ夕陽と曰ふ有り已に太だ斜なりと雖も未だ沒するに垂んたるに至らざる者也此れは止だ銀波の觀有る而已且つ落日にも亦二有り山に沒する者は必ずしも然らず海に沒する者にして而る後に始めて必ず然り是れ彼は沒する處猶ほ高く而して此れは則ち低く彼れは概ね雲烟の之を蔽ふ有り而して此れは則ち之れ無きを以てなり百聞は實に一見に如かざる哉昨來笹山波の士丸岡翁來りて鄰室に在り余因て笹山の異事を問ふ翁云ふ我郷は四圍山岳にして譬

ひば桶盆底の如く然り。故に蟲蛇多く而して蛙の絶だ大なる者あり。蛇蛙を呑むとは世の常に言ふ所なれども而れども我郷は則ち往々之れに反し蛙反つて蛇を啣むと有り。又云ふ我郷は極めて海産を獲難し。人の條蟲を病む藥有り。海磯蛸を用て之を調ふ。此物酷だ驗あり。意ふに是れ郷人の食ふ所常に山肴野蕪の類なるを以てならんと鄙語に云ふ地殊則物異と信に然り。

六日 旁里の竹内に遊び大鳳尾蕉を某家に觀る。枝々突として以て軒り葱得滴たらんと欲し枝葉扶疎すると方二間可りなり。泉の妙國寺泉州遠の能滿寺近川崎港の物に比するに至りては猶ほ見孫に屬すと云ふと雖も亦以て一方の父祖と稱す可し。

七日 村に舊と熊野祠有り竹林氏の有する所竹林氏近者家道衰ひ祠もきたる祠背に竹林あり云ふ古來節同じく長け齊しく大小又異なら

ざる者一雙を生ず稱して頼朝の旗竿竹と曰ふ。祠主嘗て之を伐り頼朝に獻じて曰く度みて戰勝を獻る。請ふ用て旗竿と爲せと。時に治承四年八月石橋の一敗源右府萍漂して此に詣る。右府乃ち大に喜び終に其地を以て之れに與ひ今に至るも仍ほ其竹を産ずと亦往きて觀る。果して其言の如く一雙殆んと同生せり亦一奇なり。

八日 保田に遊び鋸山日本寺の勝を縦觀す。保田は舊と保太に作れり。と云ふ之を聞く安積良齋云ふ。鋸山又稱保太山。友人澤子慎云。王子年拾遺記載扶桑東五萬里有磅臙山上有桃樹。大百圍所謂磅臙。當是保太其音相近。其地亦相當。此說無容疑。且寺以日本爲號。則扶桑或似有由と。意ふに此山は半腹以上は皆な純石なり。石上には樹を生じ難し。百圍の巨木。何を以て之れ有るを得ん。且つ扶桑の東五萬里と曰ふ。保田果して是に當る乎。此日晨に厠に上りしに蟹兒缺を張りて横奔縱走す。

夫子大に下
痢に苦む

亦○余○が○鋸○山○に○横○行○せ○ん○と○す○る○に○倣○ふ○邪○

九日 曉來、暑氣遽に騰り、華氏は九十四度なり、余宛喝、人に絶す。此日偶
ま泄瀉し、露裸浴湖皆な不可なり。夫子此に至りて、頗ぶ窮せり。

十日 朝、散策して漁夫と語る。巳牌より風濤大に起り、沱々渾々として、
驚濤相逐ひ、紛白駭雪洶々然たり。譬ひば白龍百千、奮躍疾呼して來る
が如し。晡時、海に入りて此れと闘ふ。壯快太甚し、登後復た落日を小浦
の稻荷祠に觀る。聊が南岬の觀に優れり。

村媪の談。旅
邸の競争。車
夫の醜劣。

十一日 村媪と談ず。遠交近攻は秦人の策、同業相惡むは小民の常なり。
村媪曰く、此地海岸の旅邸三戸、亦其弊を免れず、多くは相争ふて勝山
の歩輓夫を要す、其客を載せて至るや一人を致す毎に必ず五錢を與
ふ。草鞋錢と曰ふ、且つ茶を侷め點心を饗し、或は酒を置き款待甚だし。
往日其一戸、猶も安んぜず、更に其期に贈るに酒錢若干を以てするや

我は是れ後
越の農夫也

一戸も亦急に手帕數十切を散ず、他の一戸は未だ之を知らざるなり。
彼下奴輩の意裏汚下なる焉んぞ久しく黙するを得ん。先づ相謀りて
客を彼二樓に送り、此一戸の怪み問ふに及び、即ち告ぐるに其情を以
てし、以て其二樓の如くせんとを求めたりと、其汚下なる實に憫笑す
可き也。是日、丸岡翁去り、文科大學生澤野祖天君來りて同室す。其郷國
を叩きしに、圖らざりき我と縣を同じくするの人ならんとは、盛に那
古の三式部の墓の事を談せらる。偶爾、他郷に郷人に遭ひ、且つ盛んに
談ず。何の快事か、之れに如かん。

十二日 澤野君は天資極めて恭謙篤實、而して舉止洒落、眞率にして毫
も邊幅を修めず。此日、余、那古より本織の延命寺に遊ぶ。君事有りて、借
に岡本に至る。全身唯だ一洋觀衣、一帽、鼻揮のみ、毛脚、鬚々として、呈露、
遺無し。小竹切を曳きて行く。宛然、草野の貧農なり。君平然として曰く、

里見氏の香
火院本織の
延命寺

一〇
我は是れ後越の農夫。當さに斯くの如くすべきのみと相視て大に
笑ひたり。本織は此れを距ると四里許り。寺は里見氏の香火院にして
其歴世の墳墓及木像有り。開山は梵貞禪師。安房名勝地誌に梵貞に作
れるは蓋し活字の誤。像の前に各一札を置き。皆な其逝卒年月を書し。
曰く。三代實堯公。天文二年七月廿七日逝去。曰く。五代義堯公。天正二年
六月朔日逝去と。日本新聞に所載の延命寺懷古の一篇今茲八月一日
の同新聞に在
之には天文三年と天正六年とに作る。亦活字の誤植ならん。迂路して
國分の國分寺を訪ひ北條に出で、還る

十三日 余此地に來りて既に十餘日。今朝始めて小叔鮪三尾を見る。漁
夫云ふ。凶漁。今年の如きは無比なりと。其れ然らん毎に見る所は徒だ
海錯のみ。蝦蟹のみ。鯛魚かづの如きは終に一たびも見ざりき。此日書買
中野某と語る。某は東都神田の人なり曰く。神田は學生の淵藪にして

書買の營業

書價尤も貴し。客之れを知らず。四谷牛込の人も十の六七は歩輓瀛車
車賃を擲ち而して反て我區に來ると。奇なり。近日書買。相競ふて書目
を出版す。是れ一は鄙人は書價に所謂定價と實價との別有るを知ら
ずして送金必ず書目に示す所の定價に由るを以てなりと。人世は窮
竟愚人を以て保つ。書買は殆ど學問を要せず。書目を知れば斯に可な
り。學問有れば書に好惡有り。焉れに拘はりて世俗の流行を逐ふ能は
ず。破敗に終らざる者鮮し。と。謬に所謂以所手杖うたが。反衝目の類なり。又云
ふ。我業の最も薄利なる者は新版の學校教科書なり。價六十錢の物に
して利或は纔に五厘。之れに次ぐ者は新法律書なり。價二圓の物にし
て利或は五錢。若しくは七八錢のみ。而して其最も厚利なる者は故書
なり。但し其教科書と爲れる者は亦然らず。客の來り鬻ぐ焉。其極或は
賣價を以て之を收む。且つ客に買ふ。學生最も難し。彼れ戸をどに問ひ

古本賣買の
かけ引

高崎四景の
一富山の曉

高崎四景の
一海口の晨

塵ごどに較ぶ我れ勢或は當る可からず是に於て乎我も亦策有り彼の猶ほ貪りて更に他に之かんとするや故さらに貴く言ふて之を遣り彼をして之く所として意に満つる無からしめ以て始にして而して彷徨迷惑せしめ終にして而して嘲解冷笑し略ぼ我が買はんと欲する所のまゝにすと難き哉世路正午信の飯田の人羽生政之助氏來宿す氏は前の中國民報主筆にして嘗つて帝國大學即今之東京大學に在ると數年皆な肺を以て廢し今猶ほ加養中なりと

十四日 偶爾晏起し急に紙障を排すれば晨靄幾帶富山の景色絶だ奇なり狂喜して覺えず叫喚し亦定めて此地の勝景の一と爲す後に命じて富山の曉靄と曰ふ已にして海濱を逍遙し夫の海口に至りしに金鳥始て邑の山嶺に飛び蒼然たるの光樹間を穿ちて而して水面に來り樹は鬱乎として以て烟を帯び水は激漣として以て微靄を緝り

復た書買の
談を聴く
學生の盜賊

高崎の異風

其平生の觀に勝ると更に數等なり亦覺えず絶景と稱す定めて海口の晨眺と命づけたるは即ち此時なり午下に復た書買の談を聴く某慨然として曰く學風の頽廢せしと久し學徒の失行甚だし我が書廬の盜學徒に非ざる者殆んど稀なり其之を偷まんと欲するや先づ我が携ひたる所の者を其上に置き間を窺ふて之を併せ去る其間或は故さらに他の書の價を問ひ或は他の書の有亡を訊ね以て塵主をして必ず間を生ぜしむ第一は新版書第二は價貴き者彼等にして未だ習はざるの時は則ち已む苟も已に習ふ彼等の奪ふ所は必ず斯二者に在り而して其之を書肆に鬻がんとするや劈頭且つ一問すらく能く我が寓に來りて證印を徴するを得る乎と以て我をして疑を容れざらしむ其術巧なりと信に慨歎の至りなる哉殮後邑人を要して此地の異風を問ひしに曰く追儼に熬豆を撒く獨り我邑は除夜に之を

行ふ。除夜に歳を迎ひ及び歳首の三日等は必ず腌餼醢醢を用ゆ。我邑は唯だ吉日一回のみ。歳首と除夜と。曾て定まり無し云々。嚮きに余の塋域を観る。其制。誦經堂有りて而して寺無く。柩を堂に昇し。僧來りて經を誦す。猶ほ東都の青山のごとし。但だ堂には必ず觀世音若しくは不動尊等を安置し。別に守墳戸一有り。村人各月づき應分の米錢を給す。墳墓の制は異なる所無しと雖も。然れども新亡者有れば。則ち其最も舊き者を倒し。其上に結縷艸を布くと三重。而して之れに六稜の小木塔を樹て。以て其墓石の新に成るに及ぶと。又一隅に一大石函を置きたる處有り。粟々として故骨を聚む。諸ろ新亡者を埋むる時に掘り出したる所の舊墓下の骨を聚めたる者なりと。是れ極めて他郷に異なる所なる可し。

十五日 陰曆七月十日に當り。僧家に所謂四萬六千日なり。兒女紅を纏

ひ粉を粧ひ。壯者老者も亦衣を更めて觀音堂等に踊る。此れも亦我郷に無き所。

十六日 地僻にして人緩なり。余今日鄰村市部の理髮舖に入る。余曰く。即剃得乎。主人曰く。唯且待之。之を頃くして從事す。未だ數刀ならず。俄に鄰に往きて其人と語る。關心する者有る如し。又數刀ならずして。復た往く。斯くの如くする者總て三次なりと。澤野君言ふ。一沐に三たび其髪を握りしは古に其人有りしと聞きしが。一剃に三たび其刀を廢せしは。今斯人有るを聞く。好笑話なり。君又言ふ。予岡本に在ると數週日なりしが。岡本も亦た一陋村なり。人下土に在れば。必ず愚と爲ると。は信なり。其の村人某千葉師範學校を卒業し。今見に月俸十二圓を獲。是れ實に開關以還。本村にて人を出したるの嚆矢なりと云ふ。一人余に問ふて曰ふ。江戸君と。蓋し余が東都に寓するを以てなり。君亦醫生

荷木を去り
て幽谷に
入る者は
深く可
警

高崎四景の
影一海上の帆

乎然乎。何時而卒業乎。四五年中也。吁。英物哉。爾時君亦獲十二圓乎。と鄙
人、眼豆の如く十二圓の庸物を以て上無き者と爲す亦好笑話と謂つ
可し岡本は此れを距ると一里餘なり。喬木を去りて幽谷に入る者は
豈に常々にして警めざる可けん哉。此日南摩羽峰先生來り。湯本に投
ず

十七日 一昨夜以後は風浪。今日も猶ほ大なり。十九日に至りて常に復
したり

十八日 澤野君京に還らる。天も亦其別を惜みたる耶。五日以來。天速り
に快晴なりし者。此日忽ち曇る

十九日 事の記す可き無し

二十日 海静なると湖の如し。相の半島横はる處より芙蓉峰玲瓏直下
城ヶ島盤するの間に至るまで帆船總て數十。參差錯列し或は三五。或

南摩先生に
謁す

更に香取
より波山に向

は一二蒼溟渺茫たるの中に、素を點じ白を綴り、矚目清遠にして氣品
高逸也。余、此地の景勝を定むると既に三。今圖らず斯景に接す乃ち直
ちに其中に加え命づけて海上の帆影と曰ひ且つ之を品第して曰く、
海口の晨曦は第二。大橋の海望は第三。富山の曉靄は第四と而して第
一を之れと爲す。余の悦び知る可きなり。時に日辰に加はる
廿一日 南摩先生に通謁す。温容和言以て人に接す。其人其姓の如し
廿二日 羽生氏去る。保田に遊ばんと欲する也。冀はくは健在なれ。
廿三日 東京に還る。此日も亦海静なると往の日の如し。余が性酷だ船
に苦む今ま往返皆な斯くの如し何等の幸ぞ翌又京を出で、香取下
り波山常陸統統に向ふ
廿四日 香取神宮に賽し。利根河畔なる津の宮に至りて宿す。漁船の銚
子下浦常間を往來する者の半夜此に至るに乗らんと欲してなり

昨は海に在りて今は則ち山に向ふ遊子家を成さずして徒らに山水の放浪を成す噫我れ何爲る者ぞ父母既に堂に在さず兄妹切に郷に埃つ子牌舟に乗る長流聲無く涼笛蕭々として殆んど易水悲歌の概有り腸幾回す

藤原の遺跡小田の城、白瀧の瀑

廿五日 未だ卯牌に及ばず土浦に上陸す行くゆく萬里小路藤原の遺跡小田の城墟を訪ひ正午に筑波江戸屋に投ず白瀧瀑此れを距ること僅に半里なりと聞き装を解かずして往きて觀る菊池三溪翁が嘗て此に遊び其記文に盛稱して措かざるを以てなり何ぞ圖らん微々たる一小溪流にして人工其天眞を賊ひ之を三の架槽従り分墜し頭痛婦や迷不動尊子や赤條々をもて其下に浴せんとは俗極まれり一瞥して即ち踵を返す云ふ瀑畔には舊と老杉あり森々として之を覆ひたり往歳野火皆之を焼き景之れが爲めに墜ちたりと余を以て

之を見れば縦ひ老杉をして舊の如くならしむとも決して佳ならずと

廿六日 登山す水海道の人某偕に行く

眞鍋の公園

又更に多摩に遊ぶ

廿七日 土浦に出で、瀛車にて東京に還る途次眞鍋公園を過ぎる霞ヶ浦略ぼ一眺の中に在り亦佳景なり次日又京を辭して多摩河畔の探勝に従ふ

廿八日 途にして河畔の探勝を後にし上澤井自ら左折して先づ御嶽

多摩の御嶽に遊ぶ

在四多摩郡三田村に登る此行本と此に登るを期せず瀛車宜しく青梅に下るべし而るに余過ちて日向和田に至り爲めに且つ金剛寺を遺す已にして日向和田を過ぎ下澤井に至りたれども途上所見の山容水態皆な嘗て聞ける所に及ばず就中萬年橋は燼餘の焦斷虹にして其境も亦山地の常なる者のみ失望の餘り踵を返さんと欲したる者止だに

一再のみならず偶々客の御嶽に寓する者に遇ふ。憇息するに此れを以てす。余未だ其境の何如を知らず。因て謂ふ。河畔既に斯くの如し。御嶽も亦信ず可けんや。と然れども已に此に至る。豈に探討に力を効さざる可けん哉。と終に意を決して道を改む已にして御嶽に達すれば。神祠宏麗なり。更に其圖に徴すれば。瀑有り。七代と曰ひ。綾廣と曰ひ。祠に奥祠有り。景行天皇の祠と曰ひ。日本武尊の祠と曰ひ。意外甚だし。驚きて曰く。是れ龍池の窟也。回溪の垂翅。是に於て乎。償ひたりと。快然として頓に望を屬し。終に山上の客舎に宿す。藤屋と曰ふ。

廿九日 二十有九日の盤遊中。唯だ此日失意を以て。始まり失意を以て終る。十九日以後復た晴天なりしを。昨に至りて大に曇る。蓋し雨ふらざる者。茲に二十有五日。昨乃ち竊に恐る。雨と成るに非ざる耶。と。晩に至りて忽ち放晴す。又竊に思ふ。御嶽祠は既に之を拜せり。幸にして明

失意の第一

日雨ふらずんば則ち逗撓すると。一日猶ほ奥祠及び二瀑の勝を厭賞せん。と。何事ぞ。天に情なき耶。我に職無かりし邪。二更より俄に騒風巨雨。今朝仍ほ猛く。奥祠二瀑皆な匆匆にして山を辭す。是を此日失意の第一と爲す。已にして山を降る。昨日向和田の萬年橋の傍近に午餐するや。茶肆の主人余に告ぐるに。前路二十七八町の處に。一橋。溪流に亘る。秩父に遊ばんと欲する者は之を過ぎて右す可し。左すれば則ち甲州の路なるを以てす。余因て誤りて多摩河を以て秩父に在る者と爲し。今御嶽村の對岸なる上澤井に至るや。一意右して昨の路を走り。左右空しく程を失ふと三里。是を此日失意の第二と爲す。既に上澤井を過ぐるや。此れ自り以往は之を知らざれども。全く小丹波を過ぐるまでは水石皆な凡爲るを免れず。是に於て情を前路に絶ちて小丹波に宿す。江川屋と曰ふ。是を此日失意の第三と爲す。昨の客舎藤屋は情甚

失意の第二

失意の第三

だ厚く待甚だ般なり而して江戸屋は貪欲忍刻にして且つ其の締造
荒屋に幾く厠や戸無く室や一人の専ならず是を此日失意の第四と
爲す眞に失意を以て始まり失意を以て終る投宿の後に棚澤の深に
観ぶ亦壯觀と謂ふ可しと雖も惜むらくは些の風趣無し

三十日 天猶ほ曇れり然れども崇朝の天色は雨ならざるに似たり乃
ち更に思ふ歸途に松連寺寺は今廢れ日吹めの勝を過ぎり以て前失を
償はんと涼車にて且つ立川に至れば雨復た沛然として至る不平萬
斛直ちに京に還り斯に今夏の放浪を止む其必ず淫雨にして容易に
已まざる可きを以てなり然れども一晴一雨は天の數なれば晴天既
に二十餘日今にして斯雨有るは固より其所ならん而して常人の情
は苟も己に利ならざれば則ち曾て其當さに然るべきと否とを問は
ざるなり是れ深く慎みて慎まざる可けん哉

高崎四勝小記

今茲己亥八月余全月盤遊し之を日記して消夏日録と曰ふ其中
房の高崎に在ると三週日目錄に其景色を記して曰く大海茫茫々
として豆相遙翠而して三崎の岬相と城夕島と一葦相隔りたる
處に芙蓉巍然として天半に聳る雲烟縹緲として氣象萬千更に
顧みて右のかた久枝村を一瞥すれば松林葱々として延きて岩
井袋の翠螺に及び而して富山又蜿蜒として來りて其松間疎樹
深箐の上に落つ亦一幅の好山水と謂はざる可からざる也と夫
れ平山凡水も苟も之を極め之を盡さば猶ほ且つ筆に上す可き
者有り矧んや一瞥にして其勝を知る可き者豈に一二の筆に上
す可き者無からんや四勝を獲て四勝小記を作る

海上帆影

渺茫たる蒼溟の上に或は三五或は一二參差錯列して數十の帆影素を
點じ白を綴り而して相の半島淡影一抹長く其後に横たはり淡影盡き
たる處に一葦を相隔て城ヶ島又盤し素愈よ素に白愈よ白而して芙
蓉峰雲烟縹緲として巍然として其天半に聳る其矚目の清遠にして其
氣品の高逸なる我れ以て高崎の第一勝と爲す

海口晨眺

村端の一水俗稱大川の海に入る處に亭々たる喬松行を成し遙に左の
かた岩井袋自り來り竹樹灌莽して水を壓して其右岸に列なり而して
兩涯皆な蕪腹水忽ち蒼々の中に隠れて一橋横たはり而して時に人馬
行き藪屋點じ而して時に炊烟颯り終に以て富山に連接す富山は屏の
如く障の如く或は隱約として掌に樹間に上り或は綿々として黛を梢

上に舒ぶ海口の晨眺とは即ち是處余甚だ此景を愛し日として至らざ
る無し一日亦遊ぶ會ま卯牌なり金鳥始めて邑の山嶺に飛び殘靄模糊
として馳眺蒼然たり富山は日の昇れる處と相並べるを以て未だ其光
を被るに及ばず光先づ來りて樹間を穿ち而して水面を射樹々鬱乎と
して以て烟を帯び水は激漚として以て微靄を織り而して富山の連嶂
紺碧黠として以て夫の模糊蒼然の色と相掩映し遠景近色平昔に勝る
者數等なり是れ焉んぞ特に斯に取りて以て四勝の數に加えざるを得
んや

大橋海望

大橋とは余が假りに名づけ去所夫の海口に於て見る所の橋を謂ふ其
大川に架するを以て故に名つく目を放てば久枝海岸の行松偃仰して
態を成し洲渚の外は碧波搖盪して孤帆白一點徐ろに小浦の岬の邊り

夜景

を、行、き、而、し、て、小、浦、の、岬、近、く、左、岸、の、長、松、の、下、に、見、は、れ、伊、豆、半、島、の、翠、巒、
遠、く、水、天、一、碧、泱、滂、の、中、に、杳、靄、と、し、て、人、を、し、て、襟、懷、洒、然、と、し、て、觀、望、時、
を、移、さ、し、む、一、夜、又、偶、ま、至、る、水、樹、相、繆、ふ、て、新、月、松、梢、に、懸、り、水、は、即、ち、澄、
然、樹、は、則、ち、影、榭、亦、以、て、一、顧、す、可、き、な、り

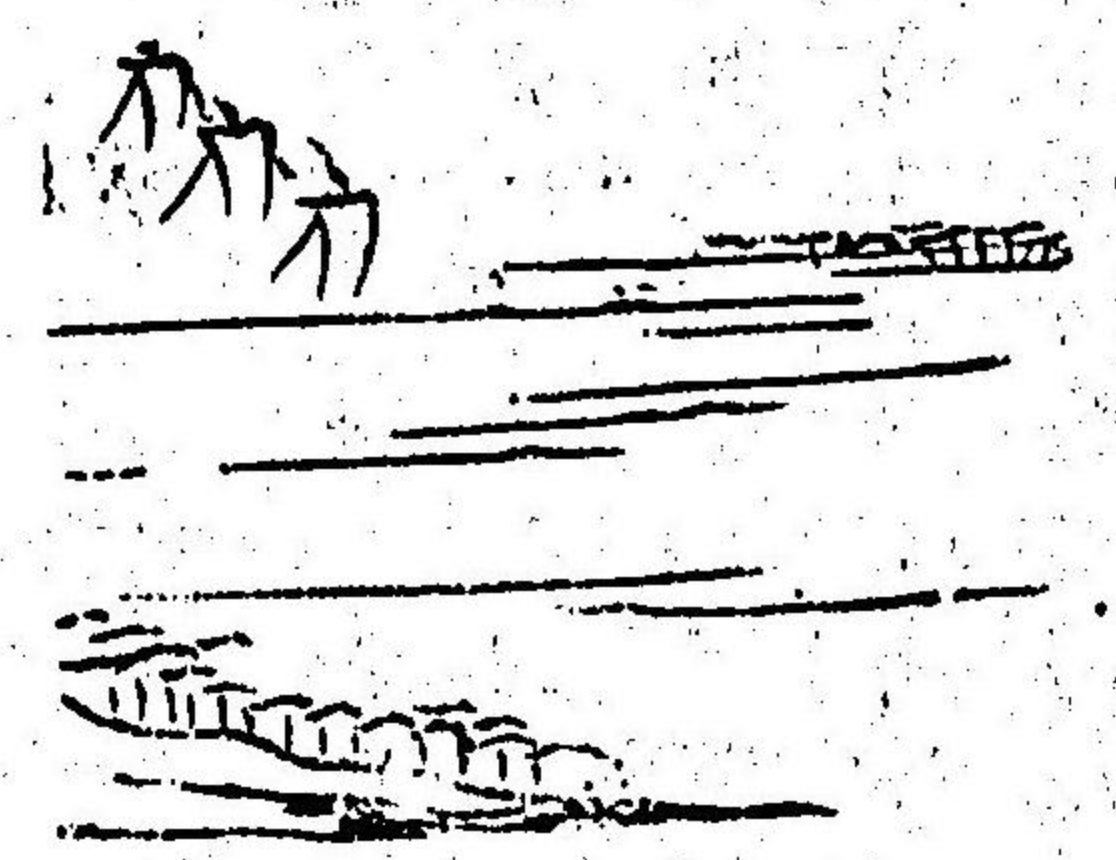
四勝の第四

富山曉靄

富山の山容
曉靄の妙

富山は夙に里見八犬傳を以て著はれたる者なり高崎を距ると東北に
大約一里其山依陸して以て峯を成す者母慮十有餘東するに隨ふて漸
く益す高く瑤簦森列して鮮淡畫ける如く余の客樓自り之を望むに曉
靄最も佳なり村自り富山の麓に至る迄千頃の田野村落深靄幾帶蒼茫
一色鷄聲人語皆其中に在り淺翠嬌青時に或は其斷處に隱見し遠にし
て之を觀るときは一大湖海陸地と交も相入る如きなり而して富山の
瑤簦靄を出て、而して靄を帯ひ揖する如く走る如く迤邐として其上

に綿互す清奇賞するに堪えたり



遊鋸山記

鋸山は房の名勝

山高からずと雖も然れども海に臨み境深からずと雖も而れども剎古く鋸山の勝は房に遊ぶ者登覽せざる莫し其山爲る房總兩州を劃して屹然として東京灣口に迫りて岬起し連峰駢々として漸く以て東北に走き横さまに之を望めば宛も鋸齒を列ねたる如し斯名有る所以なり天保辛丑の季夏梁星巖此地に來遊して詩有り曰く流丹萬丈削芙蓉寺在磅礪第幾重卷地黑風來海角有時微雨變山容三千世界歸孤掌五百億人共一峰云々其結二句曰く怪得殘雲挾腥氣老僧夜降石潭龍此れ以て其勝を概見す可し余も亦客歲一たび遊び今年八月八日に復た登る保田町保田は實は宇木郷也今從俗其市街を斥すの北半里にして元名村に至りて孔道を辭し右のかた兩山の間に入り溪畔を遡る石磊落樹

梁川星巖の遊詩

日本寺○寺在磅礪第幾重

吞海樓

日本寺の創建及沿革

鬱蒼盤阪八町にして日本寺域寺在磅礪第幾重は是れなり磅礪とは即ち保田の雅稱寺は聖武帝の勅建僧行基の創開に係る寺域に入れば先づ仁王門なり仁王門に繼ぎて而して觀音堂僧慈覺の天安年中に刻したる所の彌陀觀音の二像を安ず堂後は園池浮苻亂藻之を過ぐれば磴道百級其上を本堂と爲す僧行基の一刀三禮の藥師佛を安ず更に左すれば則ち日本寺寺の前を南行すると數歩にして僧房僧房に接して吞海樓之を聞く創建當時は七堂伽藍一として莊儼ならざる莫く十二院中一百坊あり良辨來り空海登り慈覺留まる其後一たび頽廢せしと雖も源右府が嗣を稱するに及びては其盤龍の州なるを以ての故に命じて大に廢を興し亡を繼がしめ次ぎて而して足利氏再び之を修補し元龜天正の亂時を経て寺觀三たび廢頽に屬せしと雖も安永三年僧愚傳が四方の淨財を募り止だに之を復舊したるのみならず大に山腰の阻

を治めて以て十方渴仰の徒を致す此に於て寺名益す遠近に著はれた
 りと想ふに當時の盛なりしと果して何如ぞや嘗て問于日録阿闍梨
 此に遊ぶに記す所を讀むに曰く梵宇崢嶸にして香烟天に薫ずと蓋し
 高豊巍峨として丹碧交も輝き僧房相接し玉龜寶帷髻頭雲の如くなり
 じならん爾來今に僅々四十年嘉永六年より今三十七年迄嘉永六年より今三十七年なれども維新以
 降人に信者少なく信者に妄信少なく之に加ふるに住僧の無識を以て
 す佛に事えず經を誦せず常に俗と相伍して耕樵に齷齪たり是を以て
 寺觀日に衰頽に就き獨り前記の數堂稍や舊觀を存するのみ日本寺中
 に蕪穢山積す亦傷ましからずと爲んや本堂の右從りして登り蛙石自
 り更に左に攀づ一町許りにして大佛石を得たり十丈の巨石専ら一佛
 像胡坐して右の掌を開き指々皆な尺餘なり惜む可し顔の上半を缺く
 傍に又石佛數軀有り蓄と其指頭に在りし者と云ふ巨大人を驚す徳川

蛙石

大佛石

十州一覽台

所謂流丹萬
處則芙蓉の

氏の時寺の狡僧某が猶ほ賽者を致さんと欲して刻する所幕府許さず
 顔の上半を缺ける所以也返りて蛙石に至る蛙石は形に依りて名づけ
 しなり導者云ふ此れより而上は路極めて急峻なり降りて而して別路
 を取るに若かずと會ま拉する所の一少年足を傷つく乃ち中道從りす
 中道は本堂と日本寺との間也仰げば則ち三峰巉然として峭削天を刺
 す偃儼十町にして中峰の絶頂に達す稍や夷なり十州一覽臺と曰ふ臺
 下は絶壁底無し極目萬里天風颯然たり覺えず叫喚す所謂流丹萬丈削
 芙蓉なる者を見るを得るは即ち此處なりと導者又云ふ天晴るれば則
 ち浦賀横須賀自り以て神奈川品川三浦岬及び伊豆の七島に至るまで
 布羅繡列し皆な襟迎して袖楫す可く日光筑波秩父の諸峯箱根足柄天
 城の諸山或は遙青一髪或は翠螺瑤隆す而して岳蓮巍々然として氣萬
 山を壓すと惜ひかな此日曇天にして觀望此に至る能はざるや又別徑

危愈甚則神愈旺所謂卷地黑風來海角者

到る處石佛所謂五百偈人共一峯者

星巖の詩を刻みたる者

吞海樓の景色

を取りて降る。凡そ此山は上は則ち殆んど純石。刻して而して強て徑路を爲れる處登降に各數町。只だ纔に足を擬して而して跡を投ず可く危険甚だし。但だ危愈よ甚だしければ則ち神愈よ旺。而して其景も亦愈よ佳。客歳の遊には所謂卷地黑風來。海角有時微雨變。山容者有り。壯心知らず。識らず。壯詩を放吟するなり。此間には曰く日脾堂曰く地藏堂曰く本尊無漏窟曰く通天關曰く弘法大師護摩窟。到る處に石佛群を爲す。即ち所謂五百偈人共一峰者なり。頗ぶる目を碍け心を厭はしむ。古人云ふ。名山之れが爲めに價を減ずと信なり。山頂より降ること七八町にして路山嘴に出づ。青松羅列し白波掌に上る亦一景なり。開山堂有り。刻して通天窟と曰ふ。一石仰ぎ倒る。高さ五尺許りなり。即ち星巖の流丹萬丈の詩を刻みたる者。大竹蔭塘の書なり。筆法雄健にして甚だ觀る可し。之を辭して金毘羅堂前を下れば則ち僧房及び吞海樓。吞海樓は斯山第二の名

勝なり。樓に傍ふて大石右に聳。樹木左に茂り。青山爲几。翠爲屏。の趣有り。古人又句有り。曰く入門明月眞堪友。滿榻清風不用錢。今斯樓も又月と風とに宜し。鈴木松塘の中秋觀月醉中の作有り。石に刻して而して大石の中腹に建つ眞に是れ樹間酌酒。遊明月。石上題詩。掃綠苔者なり。樓の前は平地數歩。南望敞豁にして穩然たる其景。青山幾帶波濤の如く。望下に海に朝し。幾里の蒼海。巨流の如く。風帆烟樹。波光渺茫として。吉濱勝山小浦自り以て大武洲の崎に至るまで。邑落山海形勢相蔽ひ宛然斯樓庭中の物なり。日本寺を過ぎりて而して還る

斯山は房を腹にして總を背にす。腹背皆な其頂に至る可し。然れども而背其勝を盡さんと欲せば則ち腹従りするを善しと爲す。客歳遊びて歸るや俗事蝟集し。矧んや懶慢日を亘るを以てし。光景終に茫々として空しく徒遊の塊を貽せり。今に及びて記さずんば必ず復た其覆轍を踏ま

ん乃ち之が記を作る時に己亥九月陰曆中秋の日



那古延命寺紀行

延命寺の所
在

延命寺は安房の國舊平郡安房國は並み四郡安房平朝夷長狹是れな國府村大字本織に在り安房五大寺の一にして里見氏累世の香火院爲り余が性烟霞の癖弔古探舊の病膏肓に入る今茲己亥八月安房に遊び高崎に浴湖するや遊意頗ぶる動く蓋し本織は此れを距ると四里に過ぎず而して途次に船形那古二觀音の名勝有り國分寺又其近きに在るを以てなり會ま六月以降三式部の墳墓發見説有り那古の山上山下は賽詣國を傾け險を説くと甚だ怪し余が性又事を好み併せて此怪墳墓を一見して一笑柄に資せんと欲し遂に其十二日を以て遊ぶ一路新道南行半里小濱と曰ふ凡そ此間の道路は皆な客歲新に開く所にして此地を過ぐるでまに洞道總て六あり而して其第六なる者は水潦泥濘な

舊路の景勝

日光瀨望

南無谷枇杷
と妙福寺

船形の観音
堂

り乃ち舊路を取る舊路は洞道の上に在り登攀すると兩三町なり南は
 大武岬又大房岬を望みて斷崖千尺者海邊環し村落林丘所在相擁し最
 も觀潮に宜しと爲す而して其波光は閃々爍々として日光瀨望錦鱗を
 起すの中に崖下の怪岩奇石波濤之と闘ふて騰躍噴白し覺えず絶景と
 呼ぶ者三たび此れを降れば則ち南無谷南無谷枇杷の産地也全一山或
 は擧な枇杷なる處有りと云路の左に妙福寺本と土民泉澤某の家なり
 文永中僧日蓮小松原の難を逃がれて鎌倉に航せんとする時或せし所
 にして日蓮の裸像を安ず其後日蓮當年を回顧し親しく衣裳を脱し高
 弟日法に命じ模刻せしめて某に授けたる所の者なりと既に南無谷を
 過ぎ又一里許りにして朱殿の巨巖に胎して左のかた崖腹に在るを見
 る即ち船形の観音堂なり主佛は十一面觀音像僧行基が巖石に雕刻す
 る所礎を拾ふと數十級にして至る堂下は絶壁にして眺望空豁菱花灣

觀音堂の眺
望

那古の三式
部の墓の姿

左するに隨ふて漸く以て益す殺げ形鳥帽子の如く回汀曲浦凡そ灣の
 光景悉く雙眸中に集り我が爲めに觀海の樓を置くに似たり而して舊
 朝夷安房二郡の翠巒高低起伏し蜿蜒として灣の遠近を圍繞し西南洲
 の崎に至りて而して後に止む我が爲めに假山を築くに似たり灣内は
 碧波搖盪して白帆漁船の來往夫の火輪船艦艦鬪艦の飛走すると其間
 に點綴して人をして應接するに暇あらざらしむ我が爲めに争ふて杖
 を奏するに似たり造物者の好意多謝々々觀賞之を久しくす偶ま一客
 有り云ふ亦那古の三式部の墓に詣でんとすと因て相携ひて而して往
 く客喋々として墓の事を説きて曰く墓を發見したる者は那古の近村
 竹原の一老翁也翁は今年八十餘曰を作るを業と爲し往々來りて此山
 に伐木す某日亦來り偶ま古墳墓の榛莽中に蕪沒するを見て深く之を
 悼み行厨を分ちて之に供して曰く卿は是れ如何なる人ぞ恐らくば香

花を捧ぐる者無からん。請ふ之を廻けよと。爾後は来る毎に必ず爾す一
日山上に午睡す。忽ち神有り翁を呼びて曰く。翁翁。我は是れ汝が毎に行
厨を分つ所の墓主。實に和泉式部の靈魂也。汝の恩情を荷ふと。甚だ厚し
我れ必ず汝に報ずる所有らん。苟も欲する所有らば。汝其れ之を我に祈
れと。言畢りて寤む。翁大に驚き且つ喜びて。度みて。騰りたるに。驗響の如
し。此れ自ら遠近群賽せりと。其事何ぞ怪誕不替なる。客又云ふ。其墓の式
部爲ると疑ふ可からず。川名の一少年之を信せず。嘗て來りて墓を罵り
且之を蹴りて曰く。是れ豈に何の處の馬骨漢たるを知る可けんやと。言
未だ畢らずして。卒倒す。闔村驚愕し。衆を擧げて墓に來謝し。而る後に纒
に生を回すを獲たりと。亦何ぞ妖妄奇怪なる我れ聞く。那古の山は官地
にして民地に非ずと。則ち伐木の一事既に以て疑ふに足る。是れ皆な恐
らくは狡兒か。愚民の囊錢を罔するの策矣。已にして川名に至る。緯然た

那古山の絶景

る高丘。松樹千章鬱乎として前に當る。即ち那古の山なり。路を索めて此
れより登れば。松濤颯々として蒼翠滴らんと欲し。神先づ爽なり。目を放
てば亦菱花灣。一眸中に在り。近くして那古川名より而して。船形八幡。遠
くして大武洲の崎館山。以往人家の錯落。波光の激漉。峰巒の起伏。悉く蒼
翠滴らんと欲するの間に。隱見斷續し。極て風趣有り。所謂三式部の墓の
中。和泉式部及び小式部の墓在り焉。皆な二三の石を疊ねたる者にして
母子相距る數歩。其石皆な缺剝黝味にして。固より其何人の物爲るを知
る可からざるなり。愚俗識らず。群賽すると。潮の如く。潮陥是れ競ひ。墓畔
に香烟を飄かせ。路邊に小彩紙幟を群がらしむ。乃ち神符を下す處。乃ち
其香を賣る者。其小幟を鬻ぐ者。其他鮓肆。氷麩。茗舖等。墓に傍ふて。駢聞喧
呼し。景色之れが爲めに。大に減ず。別路を取りて。更に觀音堂背に降る。堂
は峭崖に依り。菱花灣目下に。一碧の明鏡を開き。遠近の人家樹木。點々と

和泉式部墓に云へる者

愚俗群賽に可憐

那古の觀音堂

景色位置

創建

城内

紫式部の墓

三式部の墓
附すへし

して相綴り其位地宛然鎌倉の長谷観音堂而して締構の美なるとは則ち正に房の小浅艸と謂はざる可からず其創建の年時は元正天皇の養老元年にして亦僧行基の開きたる所なりと云城内には多寶塔大日堂阿彌陀堂閻魔堂等有り亦盛んなりと謂はざる可けんや左のかた女坂を下り將に門に達せんとせしに紫式部の墓有り養群二式部の墓の如し墓は近ごろ更め建つる所にして亦固より舊と何人の墳墓たるやを知る可からず三墳墓の事誠に一笑に附して可なり或は又云ふ此を距ると三里なるところに吉澤村といふ有り舊と米澤村と云和泉式部墓年に諸州を行脚して終に此に死し遺言して曰く願くば妾を那古の山に葬れと其文書見に村長の家に存せり是れ此れを其墓と爲す所以也と若し果して然らば和泉の墓は則ち可なれども小式部は則ち何如小式部は猶ほ可なりと爲すも紫に至りては何を以て之れ有る乎是れ寧

ぞ小野小町が蓬轉流落して終に道に斃れたるの説を附會したる者に非ざるを知らん哉或は又云ふ阿波と安房國訓相近し和泉式部嘗て阿波に航せんとし舟子誤りて安房と爲し因て終に此に至りしならんと和泉が鳴門に於て詠したる所を擧げて以て證と爲す其歌に曰く山畑の作りあらせしいのち艸あはのなるとたれか云ふなり然れども此れも亦臆説と謂ふ可きに過ぎざる也矧んや其歌爲る唯だ和泉の作りし所と云ふ何を以て三女此に來りたるの證と爲すを得る乎門を出づるに及びて客と相別る正木を經府中を過ぐれば即ち本織なり延命寺は岡阜を削りて構ふ今は則ち頗ぶる荒廢に屬すと云ふと雖ども巍々乎たる丹朱の樓門巨麗猶ほ人を驚す可し樓門を過ぐれば左に一字中に八稜の小堂有り即ち經堂の輪藏なり一面毎に二羅漢を畫き彩色淡泊にして礎無く柱無く唯一木之を載せ極めて古雅なり本堂に詣る規

延命寺

想ふ昔里見
氏隆盛の時

横宏做偉大にして人をして轉た里見氏の當代を想はしむ乃ち宏做偉
大なりと雖も長廊畫靜に古殿烟消えて四顧徘徊すれば只だ濕臭の人
を襲ふ有るのみ想ふ昔里見氏隆盛の時金鞍玉馬君公來詣し前驅後從
門前市を成し紫幕儼然衆僧森列し梵聲四に徹して猛將勇士綺羅星の
如く各次を以て列坐して香を行ひ誠に房總三州第一の偉觀なりしな
らん今や星霜三百回盛有れば則ち衰有るは自然の數なりと云ふと雖
も大厦將さに覆らんとし曾て一木の之を支ふる者有ると無く主僧す
ら且つ今故有りて在らずと亦傷ましからずと爲んや處守の者に請ひ
其靈廟と墓とを拜す墓は經堂の後の岡阜の上に在り廟は本堂の奥室
を以て之れと爲す廟に入れば右に始祖義實以下六世義堯に至るまで
の六人の木像を列ぬ皆な衣冠束帶せり其左に別に七世義弘の像有り
僧服して尼と相坐す其容貌は皆な必ずしも豐頬の君子と謂ふ可から

里見氏歷代
の廟

怪む可く傷
む可し里見
氏の墓

ずと雖も亦概して温然和煦の氣無きに非ず像前に各一札を置く其數
總て八八世義頼に及び像の數と相違ふ之を處守の者に叩けば云ふ義
頼公は實は之れ有るに非ずと凡そ廟内は頂格ついでんこには菊桐牡丹を刻し楣
間には則ち猛獅牡丹及び龍虎相闘ふの狀其上は鳳凰翔り下は天女舞
ひ柱楹も亦上のかたに彫刻を施すと三の一皆な丹青黃白五彩靡麗に
して彫刻も亦觀るに足り煥然として目を刮せしむ思ふに里見氏三州
の大に據有し子城十百號令一發すれば帶甲數萬進みては堂々と雄を
北條と争ひ退きては赫々として威を一方に擅にするると百有餘年是れ
其れ固より其所なる哉獨り怪む可く又傷む可きは其墓の此れと相稱
はざるの甚だしきとなり岡阜の上稚松雜艸の間に相並びたる者凡て
七つ高さ皆な二尺に盈たず處守の者云ふ墓は四世實堯公以下の物な
りと其れ然らん斯寺の里見氏の香火院と爲りしは實に實堯に生まれ

里見氏の内

ばなり按ずるに實堯は三世義通の弟なり義通卒するとき(永正十七年)子竹若年甫めて七歳實堯遺託を承けて其成人に及びたれども終に以て國を附せず國內兩裂して天文二年竹若遂に實堯を稻村城に破りて自立し義長と曰ふ一に義豊に作る、孰れの所記に从ふ實堯自殺す越て天文三年實堯の男義堯兵を起して義長を久留里城に攻殺せりと是に由りて之を觀れば五六の二世は仇敵相繼ぐ則ち其四五二世の墓石に於ける情宜しく豊大にする能はざるべし夫れ本寺を以て始めて香火院と爲したる者の墓及び之れに次ぐ者の墓にして斯くの如し乃ち終に以て準と爲し而して斯に至りたる者に非ざる歟且つ七基中其最も左なる者を除く外は一として全き者無く而して其全き者も亦實に里見氏の墓に非ず處守の者言ふ里見氏の墓は中間の五基即ち是れなり且つ其地も亦舊は此地に非ず此地には本と淫祠有り此れ實は其祠

誰か想はん
斯くの如き人
者即ち里見
氏の墓ならん
んさは

村上義清等
の墓

女俠鎌倉

中に在りたる者なりと嗚呼年代已に久しと云ふと雖も子孫存亡を知る可からずと雖も臣有り民あり誰か意はん斯くの如くに或は缺け或は壞れ慘然として寒烟涼艸中に没せんと欲する者即ち是れならんとは英雄畢竟生存中榮華は本と是れ權花一朝の定まりにして復た蓋棺の後の枯榮を問ふ可き者に非ざる耶然りと雖も我れ嘗て信に遊びて阪城村上田松代を過ぎりしに村上義清の墓有り過年既に六七にして今は詳には之を記臆せずと雖も高さ母慮六尺許り其傍に石桓表有り高さ三尺許り又此れより十町にして北條山中に村上國清の墓有り辰巳のかたに村上顯國の墓有るとを示す皆な村上の舊臣出浦某の玄孫平左衛門清□の建つる所なり又嘗て譚故書餘を讀みしに女俠鎌倉なる者有り上總市原郡池和田村の農夫の女也池和田に城趾有り相傳ふ里見氏の將某の居城にして北條氏の攻陷する所と爲りたる者な

りと鎌倉毎に泣きて郷人に謂ふて曰く州民は誰か里見公臣民の胃に非ざらん國亡びて三百年一人の興繼を思ふ無きは何ぞやと夫れ三州の大は村上四郡の地に孰れぞや數萬帶甲の衆は一賤農豨無きの鎌倉に孰れぞや我れ終に此墓に慄焉たらざる能はざる也寺の弔古此に於て畢る乃ち又國分寺を訪ふ

國分寺
孝子伴家主の碑

國分寺は此れを距ると提徑半里館野村大字國分に在り即ち聖武の朝に僧行基に勅し毎州に建てしめ給ひたる所境内に本州の孝子伴家主の碑有り家主は承和年間即ち仁明の時に天皇の時に人にして碑は嘉永二年に建つる所大納言日野資愛卿の篆額碑文は續日本後紀の文を引きて之れに代ひ(其文に曰く)開救撰續日本後紀五卷承和五年臘月辛丑安房國言安房郡人伴直家主立性肅默常守孝道父母沒後口絶滋味建廟設像四時供養事死如生未嘗懈倦量其因心可謂孝乎勅宜叙三階終身免戶田租旗門閭

萬石藤助義民の墓

と按ずるに旗字は必ず旌の誤承和五年は今年己亥を距ると實に六十二年なり下に家主が跪きて香を行ひ謹みて合掌して墓木を拜するの圖を刻す欽慕至れりと謂ふ可し其墓木は今猶ほ宇蓋野に存在して孝子塚と曰ひ俗訛りて庚申塚と云へ香火未だ曾て斷えずと云ふ大なる哉孝の徳又寺域内の釋迦堂の前に墓三基有り皆な豊高にして觀る可し其中央なるは義秀院一法常感居士と刻し居士は姓は秋山左なるは貞信院劔室道霜居士と爲し同上飯田右なるは萬法院晚叟道解居士と曰ふ同左衛門本正徳元年奮然身を挺んで衆の爲めに領主屋代家の虐政を哀訴し歳の十一月二十六日に萱野に刑せられたる義民の墓なりと云ふ余の此に來りしは又併せて詳に此事を訊はんと欲するなり而るに延命寺より此に至るに妄りに提徑を貪りて田間を徑し五歩に一問し十歩に再考し午後三時に垂んとして纒に達するや乃ち匆

那古延命寺紀行

八幡の八幡

征清記念碑

故四部都督
從二位勳一
等功三級子
爵陸軍中將
山田獨眼龍
將軍の撰文

々、歸途に就き過ちて聞く所無し是を此行の恨事と爲す。來路に既に懲
る。乃ち孔道山り北條に出づ。行松竹籬路清くして且つ坦なり半里可り
にして八幡八幡祠有り。故に云ふ。祠は境域廣潤にして淺艸綠氈の如く。
喬松楚々として織塵を留めず翠蔭雲のたどく翳するの下に驛牛濯々
として優遊自適し間淨高深なり一拜して過ぎんと欲せしに偶ま域中
に彰仁親王殿下の題額し給ひたる所の征清記念碑有るを見る鐵柵に
て之を圍み幅五六尺高さ一丈有餘巍然として仰ぐ可し其碑文の首一
節に曰く

明治二十有七年清國滌盟。我皇赫怒出師問罪。天兵所向無不克捷。
越二十有八年清國納地獻幣而請和國威宣揚于海之内外猗嗟盛矣哉。
故西部都督從二位勳一等功三級子爵陸軍中將山田獨眼龍將軍の撰
文たる所起し得て極めて莊重に極めて體を得碑石と共に雄大なりと

呼嗟山地將

宮岳の晩望

謂つ可き也三讀七讀し而る後に纔に去る呼嗟將軍は功勳一世を蓋ひ
名望内外に高かりしの人なり今其文に對するを得たれども其人は則
ち勇銳にも且つ見るとを得ず我の三讀七讀する所以は豈に惟だ其文
の妙なる爲めのみならんや悲ひかな。又半里許りにして那古觀音堂路
に當る小蘇言有り曰く天下之樂嘗諸飲食一飽後皆委臭腐と此れ自ら
以往の諸勝は我れ來時既に已に飽きたり矧んや此時は日益す傾きた
るをや因て左折して其下道を行き旁せず迂せずして高崎に還る時に
午後六時半落日方に宮岳の右腹に沒せんとし朱殷數道嶽影秀麗煥燦
前の盛饌の外別に盛饌を具ひて以て我を饗せんと欲する者に似たり
我も亦安んぞ筆の筆を下さざるを得ん哉是に於てか併せて之を記す
明治三十二年九月十七日

自香取祠遊筑波山紀行

香取鹿島は關東の大祠にして日光筑波は坂東の名山なり丁巳明治二の夏余鹿島を過ぎり辛卯明治三の秋又日光に遊ぶ而して香取筑波に至りては則ち未だしなり今茲七月必ず往かんと期したれども又蝸齒の爲めに果さず越て八月二十三日に安房より還るや意を決して遂に赴く時に其翌二十四日本所錦糸堀より佐原下行の臨時涼車に駕す先づ香取祠に賽せんと欲するを以てなり

午前八時長蛇隊々として東を指す一瞬にして平井驛田畝の間所在蓮花方に爛燦として滿開し清香馥郁瀾望清逸なり既にして小岩を過ぎ市川に至る鴻の臺巍然として平野の中に拔起し新刀根の長流の渾々として北よりすると相繆ふ坐るに永祿の昔里見北條兩雄虎戰の狀を

先づ香取祠に賽す

平井の蓮花

勢の盛の形

香取附近の名所

其一矢作城

其二字岩ヶ崎の城山

其三觀福寺

其四諏訪山

想見するなり千葉佐倉滑川等の諸驛を経て十一時四十分佐原に達す此行佐倉以往は皆な生路に屬するを以て前きに頗ぶる香取名所圖會明治三十一年七月を讀みたりき其香取參詣案内の章に佐原及び其附近の名勝を列擧して曰く矢作城趾香西村字大崎に在り舊と千葉氏の一族國分氏の數代の居城にして永祿天正の交に里見義弘の將正木正康に攻陥せられし者曰く字岩ヶ崎の城山天正十九年徳川氏の臣鳥居元忠が矢作城の用材を移して城を築かんとせし所にして當時元忠が伏見に戰没せしを以て功を竣ひずして寢みたり其地利根川に臨み信田一に信太に作の浮島微に見え風景絶佳なり曰く觀福寺香西村字牧野に在る巨剎にして其門の鸞の彫物は左甚五郎の作寺に天平の古碑及弘安四年元寇掃攘御祈禱報賽の爲め香取神宮に納めたる者と云へる極めて古雅なる掛佛三體有り曰く諏訪山停車場より三町の近きに

自香取祠遊筑波山紀行

泰山前に在り何ぞ必ずしも蟻塚を問はんや

香取の道

あり眺望甚だ佳なりと余の烟霞弔古の既に痼疾と爲れる此れ皆な其初は香取と併せ觀んと欲したれども之を大觀すれば區々たる偏隅の一名勝のみ泰山前に在り何ぞ必ずしも蟻塚を問はんやと唯だ諏訪山を過ぎりて直ちに香取に往く香取は佐原停車場より三十二町坦々たる大道漸く以て邱陵に入る其路或は土を盛りて窪めるを平にし或は邱嘴を殺ぎて迂れるを直くし或は結縷艸を蔓らしめて其崩壞を禦ぐなど用意修繕兩つながら到れるは流石は儻邁き官幣大社の道と謂ふ可し左りながら其土質は大半は沙にして連日の快晴に熱して火の如く昨日まで涼を海邊に食りし身は流汗滴々として宛も熱湯に浴する如く神宮に至るに及びて始めて昨の吾に復りしこそ是非もなや

香取の神

千早振る神代の昔天照太神この豊葦原の千五百秋の瑞穂の國に天ッ

香取祠の宮

日嗣を天降しましし時八百萬神の推し薦むる所と爲り雄姿堂々として武甕槌を副として國中の早蠅なす荒振る神を掃蕩し給ひたるは斯神にして世の常ならぬ本邦軍神の祖にましし延喜式神名帳三千一百三十二座の中にて伊勢皇太神宮度會神宮と相並びて獨り鹿島と共に神宮と稱する尊きみやしろなりと聞けば先づ汗を拭ひて襟を歛め恭しく拍手して三拜し扱て謹みて殿内を窺ひ奉り顧みて宮域を眺むれば扱ても神々しや樓門の巍々乎として東西の廻廊漫く連れるは事々しくは言はず盡々たる杉の老木幾百千章鬱然として神宮を護るが如く就中社務所の前なる一本の如きは巨幹數人を隠す可し羅漢松の大樹有り又此れと相並びて相劣らざらんとする者の如く直幹亭然として天を衝き長條垂々として以て地に達す其神武の御宇の十八年以來みや柱太しく建て續けしと聞えたる二千五百年餘の古き御社なる

自香取祠遊筑波山記行

香取祠の結構飾

淫祠小祠反つて金碧雕鏤す

祠背の庭園

其一梅園

其二櫻の馬場

園内の景色

とは唯だ此れのみにて、も人をして爾か思はしむ、然るに最ども畏しや
 神宮の結構殿内の裝飾は堅牢を旨とするのみにして質素にして飾ら
 ず拜殿の格天井の止だ白木のまゝにて安排したるのみ些の彩色を爲
 さず彫刻を加えざる如きは人をして倍す欽仰崇敬の念を起さしむ、誠
 や名士は飾らず飾る者は齷々たる斗筭の徒のみ淫祠小祠反つて金碧
 雕鏤を以て事と爲す亦以て人情世態を概見す可きなり、祠背に出づれ
 ば櫻樹數十百種老松と相錯はり前面は忽にして地勢峻峭して此處に
 は更に梅林を成す、梅林を成せし處を梅園と稱し櫻を植えたるを櫻の
 馬場と曰ふ、梅園に觀湖丘といふ有り、馬場に香雲館と云へる有り、香雲
 館とは花時に櫻花薫發して之を望めば曳々として雲の如きの意、觀湖
 丘とは湖水の眺望を領するの意なり、目を放てば湖來十六島は古の香
 取の海の名残りなる沼澤と相交錯し之れに兼ねるに利根の巨浸を以

津の宮の村田屋

客心悄然河畔の客夕

てし之を助くるに常陸の山々を以てし、又遠くは浪逆湖をも望む可し
 と曰ふ、山水を兼ね得て大觀既に佳なり、矧んや利根白帆の來往十六島
 其他の林樹邑落綺時繡錯し、誠以て稱す可し、食賞多時に
 して漁船の銚子下土浦常陸新間を往復せんとする者の半夜此に至る
 に搭して以て筑波の路に出でんと欲し、午後三時津の宮の鳥居河岸な
 る村田屋に宿す、村田屋も亦景色に富めり、百年の老舗利根の巨流に臨
 みて室を開きたるを以て簷宇豁如として、目天際を極め、遠くは筑波諸
 峯の翠微の綿亘、近くは十六島對岸の風光翕然として、我眉宇に萃り、雄
 渾曠遠の氣象有り、但だ時漸く日暮にして、夕陽樹杪に在るに至りては
 歸鴉落霞、野寺に鐘響きて、蘆葉暮風に搖ぎ、自ら客心をして悄然たらし
 む、一陶を傾けて早く褥に就き、十二時二十分に至りて、乗船す、長流聲無
 く、涼笛蕭々として、倍す客心を傷ましむ、少しく遡りて利根川を辭し、牛

霞浦の夜航

堀より霞ヶ浦に入る是日恰も陰曆十九日にして周回三十四里十七町の大湖水唯だ見る月色霜の如く漁火寒星に似たるを知らず其長汀曲浦浮島相見岬湖來出島富田等の諸名勝の果して如何なるを翌朝五時頃土浦に上陸せり

土浦の名勝
其一、常陸大掾國香の廟

此地の字明神に常陸大掾國香の廟有り三島中洲先生嘗て此地に游官すると二年霞浦遊蕩の著有り其中に云ふ常陸國志云國香館于眞壁郡石山將門之來攻拒戰力盡也自殺于館中而今其墓在茨城郡那珂港淨光寺廟在于此者蓋其子孫幾世襲職于多氣于石岡瓜葛蔓延全國或移屍于彼或招魂于此墓廟之南北異處職之由と日本名勝地誌第二編常陸國新治郡の條には則ち曰く國香の墓當國の内に尙ほ二有り一は本郡石岡町字貝地の平福寺大掾氏歴代墳墓の中央に位せる其最も大なる者即ち是れ一は眞壁郡上野村大字東石田小字石田の田圃中に在り五輪の

其二、土浦の城趾

石塔にして高さ三尺許り又其石塔を距ると西北に三四町の丘上なる農家の庭前に石棺の表面纔に地上に露出する者有り相傳ふ國香の遺骸を納めたる靈柩ならんと又其下總國北相馬郡の條に云川原代村の安樂寺にも之れ有り一小塚の上に高さ七尺許りの五輪の石塔を建てたる者是れ將門記に國香藤代川に戰死すと有り今此寺の東境に傍ふて蠶養川(一に小貝川に作る)の古道有り古藤代川と呼びたるにや寺傳に依れば貞盛既に將門に復讎し遂に父の戰死の地に其遺骸を葬り且つ其菩提を弔ふ爲め當寺を創建せりと國香墳墓の事斯くの如く紛々たり我れ未だ其孰れか是なるを知らずと雖も恐らくは中洲先生の説其正鵠を得たる者ならん外に土浦の城趾宇西町に在り霞ヶ浦に枕み丘陵其南北を擁す相傳ふ平將門の築く所也と永享中若泉太郎左衛門據之爾後天正十八年に至り當時の城主菅谷範政豊臣氏に襲はれて走

京の東山も
斯くなん

眞鍋町に就
きての一笑

る豊臣氏之を結城秀康に與ふ後ち徳川氏の覇たるに及び藤井西尾土屋大河内の諸氏相承け最後に土屋氏再び封を受け以て明治の維新に至ると同じく名勝に見ゆ土浦を離るれば一小原京の東山も斯くやと憶ひ出さるゝ遙なる山々の姿優しく雲を帯びて横さまに亘りたる其後に双峰屹然として馬耳の如くなる山有るを見る問はずして筑波の峰たるを知るなり豈に山靈欣喜して我に揖するなるか抑も我に其貌を誇らんと欲するなる邪其前なる山々は後にて小田の山并に其山續きなるを知る小田は此れより三里許り小田城趾の在る所なり其れより一里程手前に藤澤村萬里小路藤房卿の遺跡有り皆な筑波の道傍なり既にして原を過ぐれば人家復た甍を比べ坂に倚りて小都會を成す眞鍋町と曰ふ此町は舊と土浦に屬し土浦の眞鍋町と曰ひしとか近頃は獨立して止だ眞鍋町と曰ふ此れに就き一笑話を聞けり此の町と相

藤澤村

距る五六里筑波山の彼方に眞壁町有り眞壁郡に屬せり然る處從來の慣習より兎角土浦の眞鍋町と言はねば通せず若し單に眞鍋とのみ言ふときは眞壁と間違ふと鮮なからず貨物郵便等の眞壁に往くと往々なりと慣習とはいひ亦田舎人の田舎人たるを見る可し坂の中央の左に眞鍋公園有り嘗て聞く霞ヶ浦の勝景一眺の下に在りと打悪しく湖上の朝霧猶ほ濛々たり乃ち歸途に譲りて去る坂盡くれば即ち路三又して石桓表有り藤澤小田の兩趾の此れより左す可きとを示すを以て亦問はずして筑波の左折す可きを知るなり直路平坦にして高原を行くと一里半餘大畠を過ぐれば則ち藤澤村孔道を辭すると七町小田の幕下菅谷左衛門尉の居趾たりしといふ古城趾其村學究の説に据るの濠塹古の面影を殘せるに傍ふて北方は近く小田山脈の山々を負ひ南西は直ちに截然として以て平原の遠く開けたるに臨み形勢壯大なる

自香取廟遊筑波山紀行

藤房卿遺跡
の地さいへ
る處の地勢
中洲先生の
撰文

是を藤房卿の遺跡髮塚の地形と爲す中洲先生撰する所の遺迹之碑有
り其詳は其文に就きて見る可し其文の要に曰く
藤澤村神宮寺南平田敷畝稱公宅趾有土隆起其中稱髮塔村民來栖次
郎左衛門廬其側守之曰公初謫居于此及歸京遁世之後再來住而沒焉
髮塔即埋遺骸處我先有主計者實從侍焉子孫至今祀神主藏遺器觀之
果信因徵之古傳記皆曰北條高時流公于常陸使小田治久監護焉太平
本史常陸國志而本村係治久食邑則謫居于此地明確可信但其所終或曰溺死
南海朝雜記南或曰寂于城之妙心寺南山巡狩錄或曰不知所終吉野則
其葬于此與否未可知然所謂髮塔者蓋主計埋遺髮招靈魂而其獲之北
山祝髮之時乎將收之南海溺死之後乎亦未可考
云々碑の後に所謂有土隆然是即ち髮塔碑の右に一小石祠是れ古來塔
上に在り建碑の際此に移せし者又其右に之と相隔つると數歩にして

是れ果して
藤房卿の終
焉の地か

荒れ果てたる祠二つ有り一は文中に所謂來栖某の經營せし者にして
一は水戸の人奥田某の企畫せし所皆な藤房卿を祀らんと欲し相軋り
相競ふの極官の允さるる所と爲り皆な憾を飲み中途にして工を廢し
たる者也と深く惜まざる可けんや抑も余輩淺人何ぞ嘗て事を解せん
矧んや藤房卿終焉の事は殆んど雲烟茫茫に屬す然りと雖も理に据り
狀に据りて善く之を推さんか則ち豈に必ずしも得て知る可からざら
んや余を以て之を觀れば某の所謂遂葬于塔下者是れ甚だ謂なし何ぞ
や所謂髮塔の古稱以て之を證す可し果して塔下に葬りし者ならんか
何を以て之れに名つくるに區々たる頭髮を埋めたるの意のみに取ら
んや又某の所謂及歸京遁世之後再來住而沒焉是れ最も謂無きなり勿
論謫居の此地たるは相違なかる可きも請ふ人情を以て之を思へ深く
世を隱るゝ者何を以て己を知る者有るの舊謫地に再ひせんや且つや

此地の小田と相距る實に前述の如し乃ち藤房卿をして肯て再び來らしむとも能く永く此地に忍ぶとを得んや其故何ぞや藤房卿の遺世は建武二年七月にして源親房卿の小田に入城せしは延元三年九月其間僅に三年を隔てたるのみ且つ向きに藤房卿を監せし者は治久の父高知後に親房卿を迎えしは高知の子治久と云ふ説有れども孰れにしても治久の藤房卿を識れると知る可く而して親房卿の至誠愛國なる藤房卿にして果して此に在らしめば必ず知りて而して起たしむ可く藤房卿の深く其迹を隠す親房卿の來るに遣はし必ず遽然として而して去らざるを得ざるべし然らば則ち何を以て斷じて終焉の地と爲すや或は親房卿終に之を知らざりしが將た藤房卿其來るに先だちて既に逝きたりしか果して此二者を出でずんば則ち纒に以て終焉の地と爲す可きなり

小田の城墟

小田の城墟亦中洲先生の撰文の碑有り此城は文治の頃小田氏の先八田知家の築きたる所にして子孫世々此に居る傳ひ云ふ北畠親房卿が萍寓して義を唱ひ且つ書を著せし處なりと孔道の左小田村落の背後田圃の間に方一町許り墮濼の迹猶ほ明に見る可く中に大なる一と本の樛虬幹礪何屈蟠して礎を成せるを見る是を實に其地と爲す其碑の文に曰く

中洲先生小田城墟の撰文

後醍醐天皇用結城宗廣議遣公等奉義良親王鎮東奥海上遇颶諸艦相失公漂至本洲東條浦乃據阿波崎神宮寺兩城而爲畑田時幹所攻奔依小田治久于本城遣伊達行朝于伊佐城中御門實寬于駒城招緝東北官軍大振賊將高師冬來攻不能援已而治久通賊公乃投關城中略公之在本州凡六年而在本城者四年單身當強賊朝守暮戰寢食且不遑而遙愛行宮草創朝典不備執筆矢石間著職原抄獻之而中興業不終終無用於

宋の陸秀夫
と親房卿

是れ即ち英
雄胸中閑日
月なる者

碑文の銘

筑波町

當時、然後世講王典者、獨賴此篇存下略

と。嗚呼、余、卿の人と爲りを欽すると久し昔は陸秀夫、宋室の困頓流離して正に亡ぶるに垂んたるに際しても猶ほ日に大學章句を録して以て進講せしと云。夫れ人萬事到底休すと雖も一日存するときは一日道を講せざるべからず我れ宋の史を讀みて此に至る毎に未だ嘗て親房卿の當年の事を憶ふて深く其誠忠大節の期せずして相符するを感せずんばあらざるなり、碑文の銘に曰く

波山之南 霞湖之北 斯表舊墟 豐碑深刻 孤軍捍賊 威振八州
鉅筆垂法 文照千秋 山乎雌頰 遺勳曷沒 湖乎雌乾 餘澤曷竭

と。嗟乎善く之を盡せり。懸吊すると之を久しくして去る。一里許りにして北條町町の中央より右折す。脚尖忽ち仰ぎ直ちに筑波の山に逼りて筑波町の人家林木歴々指數す可し。正午筑波町に達す。里門に石華表有

所謂山中の
諸名勝

り以て之を劃し表以内は逆旅比屋戸々皆な層々として漸く以て山腹を攀ぢて營構すること猶ほ毛の伊香保のごとく宏壯華潔なり。一丁目の江戸屋に投す。空氣清涼にして蚊蠅鮮く意體甚だ快なり。明且登山して歸途再び眞鍋の公園を過ぎりて歸京す。時に其月の二十七日なり。き抑も余の此行に於ける最も屬望せし所は實に斯山に在り。則ち余の斯山に於ける宜しく最も之を丹腹にし之を錦繡にすべきなり。古來謂はずや八州の名山なりと。又謂はずや雪は申さず先づ紫の筑波山と。然るに何ぞ圖らん其山中の諸名勝たる。曰く三日月石之を摩すれば以て頭痛を醫す可し。曰く開運石之に隣らば必ず幸有り。曰く國割石。太古の時八百萬神海内六十餘州の州域を定めんと。まて相會議し給ひたる處。曰く胎内寶。天照太神御誕生の寶なり。曰く天の岩戸扉石。昔は頗ぶる危険にして武藏房辨慶七たび此に來りしも七たび踵を返したりと。其他御

櫻歌會の遺

神樂石と曰ひ御飯臺石と曰ひ高天原と曰ひ櫻塚此處には小野の小町
 手植の櫻といふ有り因て斯稱有りと曰ひ多くは皆な神怪妖妄にして
 之れに加ふるに太古の姫歌會常陸風土記に之を記して曰く夫筑波岳
 中略自阪以東諸國男女春花開時秋葉黃節相携駢闐飲食齋寶騎步登臨
 遊樂栖遲其唱曰都久波尼爾阿波牟等伊比志古波多賀己等岐氣波加彌
 尼阿須波氣牟也都久波尼爾伊保利豆都麻奈志爾和我尼牟欲呂波波夜
 母阿氣奴賀母也詠歌甚多不勝載車俗諺曰筑波嶺之會不得娉財者不爲
 兒女矣是れ所謂歌垣のとなり(の遺習を以てし餅に男女餅有り御幸
 ケ原にて之を鬻ぐ御幸ケ原は男體女體兩峯の中央なる稍や夷なる處
 の稱石に男體女體石有りこの石は下は一にして上は二御飯臺石の隣
 に在り皆な鄙猥口にす容からず况んや之を筆にす可けんや且つ山中
 の茶屋々々は丸で當然に賣り附く可き權利有る如く此れは當處の名

山中の茶屋の惡弊

筑波山頂の眺望

物なり是非召し上れと盼付けもせぬ田樂餅白玉水などを強ゆるの惡
 風有りて甚だ厭ふ可く而して斯風獨り山中の茶屋のみならざるに至
 りては最も深く此山の爲めに惜まざるを得ず是れ余の斯山に於て記
 する所無き所以なり然りと雖も是れ止だ其半面の觀のみ若し夫れ三
 千一百八十尺の山頂筑波山の高さは通常爾か云ふ日本風景論には海
 抜八七八米突と有れども今通常に従ふ又女體山は猶ほ高きと三十尺
 三千一百八十尺とは男體山の高さなりとこは茨城名所案内に見ゆ極
 目際無く飄々として神化し山川邑里互錯羅列し雲烟倏忽氣象轉瞬の
 壯觀と夫の藤田小四郎等が斥候の遺跡御幸ケ原即ち是れ其一茶店に
 くすぶりたる一の木頼有り依雲亭と刻す實に小四郎の書し且つ刻し
 たる所なりと店主寶視して肯て賣らず石の奇木の怪祠の美等に至り
 ては是れ固より肥さる可からざる者然れども此れは則ち世に既に

藤田小四郎の遺跡

自香取祠遊筑波山紀行

六八
妙文の在る有り描き盡して遺憾なく獨り小四郎等遺跡の事を遣せるのみ余輩の拙文に須つ無し菊池三溪翁の登筑波山記の如き即ち是れなり是れ其敢て併せて之を記さる所以なり



登多摩御嶽山記

御嶽山の所
在

山路

御嶽山上

今茲己亥八月二十八日多摩河畔の勝を探らんと欲して多摩に遊び中途にして廢し上澤井より左折して御嶽山に登る山は武蔵の國西多摩郡三田村に在り青梅を距ると西に四里餘り多摩の河畔を距ると左りに五十町山の上に御嶽祠有り故に云ふ脚尖漸く仰ぎ既に河畔を距ると二十町なるところに一橋溪流に架す之を過ぐれば坂忽ち急にして曲折四十有餘但し十七町目よりは緩なり三十町の間は老杉森然として空を摩し時に巨壑に臨み宛然高野山四十八坂の觀有り橋畔に禊の瀑有り一小瀑のみ一瞥して去る山上は人家數十概ね舊御師(神官)の家なり風俗敦厚にして甚だ人意に快なり祠前は一小市坊を成す茶屋町と曰ふ其茶肆二戸有るを以てなり其一は藤屋と曰ひ又旅舎を業とす余

始は翅を同
溪に垂れた
れども終にた

本と此山を知らず今來りて登りしは實に此行の期せざる所なり瀛車、
宜しく青梅に下るべし而して余誤りて日向和田に至り爲めに先づ金
剛寺を遺す既にして日向和田を過ぎ下澤井に至りたれども其山容水
態皆な嘗て聞く所に及ばず就中萬年橋は燼餘の焦斷虹其境又山間の
常景のみ大に失望し歸去來を賦せんと欲する者數ばなり偶ま一客に
邂逅し終に此に遊ぶ乃ち想ひらく多摩の河畔は古自り東都人士の嘖
々として飽稱する所なり而して猶ほ彼が如し則ち此山の勝も亦知る
可きのみと擔を藤やに卸すや先づ主楹に問ふて神祠の圖を得て之を
展ぶれば瀑有り花有り花は其時に非ざるを以て今之を措く其花は櫻
山谷に亘る千本櫻と稱す祠前の右數町に在りと云ふ瀑を七代と曰ひ
層々七疊なり別に又綾廣の瀑有り而して祠宇も亦宏壯美麗なる者の
如く信に意外なり余遑々然として喜びて曰く始は翅を同溪に垂れた

皿池に奮ふ
を得たり

御嶽神祠の
宏願

祠神、祠格、
奥の院

神祠の寶什

り、と雖も終に皿池に奮ふを得たりとは斯れの謂なりと時に日既に晡
なり因て楯に戯れて云ふ山中の觀光は已に遅からん唯だ神に賽せず
して先づ燕息すれば恐らくは罪を獲災を蒙らんと急に趨りて其域に
至れば果して料る所の如く樓門丹碧拜殿宏壯にして神庫有り額殿有
り小祠十有餘本祠を環し亦皆な朱黃の美を極めたり余謹んて拜殿に
額づき恭しく祀神を問ひ奉れば曰く大貴已命少彦名命にして祠格は
府社日本武尊及び景行天皇を以て奥の院と爲す相傳ふ武尊東征の歸
途此に登りて其鎧を埋め給ひし處にして是れ此國の武藏の名を得た
る所以なりと徘徊の頃老祠人に會す更に叩くに其寶什を以てすれば
其人云ふ第一なるは日本武尊の御鎧金かな具菊の紋ぢらしなり秩父
の重忠寄附の重忠の守り鎧實は神功皇后御所用の物同じく重忠寄附
の長劔寶珠丸四條帝の御乘鞍并に其附屬品一式徳川氏より納めしと

集古十種甲冑の部に載
之の御鎧
に就きて某
氏の談説

いふ天下太平不抜の太刀但し無銘にて三隣の紋有り蓋し前北條氏の
奉献する所ならん及び所澤の人某が奉りたる正宗の太刀等を其重な
る者とし其他徳川氏若しくは旗本諸家より献上せられし者數ふ可か
らずと按ずるに集古十種の甲冑の部に載する所の本祠所藏の甲冑二
有り其一は紫裾濃甲冑と記す菊模様有り日本武尊の御鎧といふ者な
る可し一は赤威甲冑と曰ふ所謂重忠の寄附したる所ならん余が知人
某氏云ふ武尊の御鎧と云ふは雕鏤精巧にして華麗人目を驚かす昔享
保年間に時の將軍吉宗公罷々柳營に取寄せられ武藏國名の因りて起
れる所なれば大切に保護す可しとの上意有りたる程の物にて近頃寶
物取調掛りより國寶と認定せられたる物なり但し日本武尊の御鎧な
るや否やは未だしなり口碑に据れば天平年間即ち聖武の御宇に掘り
出せし者なりと云ひども余が親しく睹たる所にては斯一事は聊か疑

三王阪の眺
望

ふ可し然れども亦必ず源平氏以前の物たるは疑ふ可からずと某氏は
見に職に東京大學助教授に在り久しく修史の事に興り毎に古文書取
調の爲めに各地に出張せしめらるゝの人なり余や孤陋寡聞にして其
考古美術の學に於ける盲者も啻ならず今斯間に來りて斯物を視るの
眼無し何ぞ慚愧に禁えんや還りて三王阪に至る櫻門と銅の鳥居との
間を謂ふ三柱祠有りて路少しく仰ぐを以てなり東面すれば兩峰近く
我前に當りて並立し山川城邑躍然として其間に見はれ夕陽斜に之れ
に被り綺縠觀るに堪えたり老病人我が爲めに一々指説して曰く兩峰
中左なる者は日出山と曰ひ右なる者は麻生山と曰ふ麻生山の右に當
りて人家簇々たる者は八王子なり日出の左に見はれて山峙ち邑見ゆ
山は村田山と曰ひ邑は則ち練馬邑二山の間は原を平井の原と爲し邑
を川崎と爲す兩水銀蛇の如く蜿蜒として終に相會するは秋多摩の二

登多摩御嶽山記

水なり若し天氣晴朗ならば横濱畫島より以て伊豆の大島を見る可し
と時に日既に山陰に没し暮色漸く蒼然たり乃ち祠人に謝して藤屋に
還る此山海面より高きと三千八百尺極暑猶ほ且つ八十二三度を越え
ずと夜氣陰森暑肌に殆んど粟を起さんと欲す小酌して快寝す此夜亥
牌より俄に暴風強雨

翌辰牌に藤屋を辭し三王阪より左折す左折すれば即ち坡坡盡くれば
嶮一路鬱然たり已にして路窮まるや巨石磊々として厦屋の如く高樓
の如し環廻して再び之を諦すれば全峰舉な一巖にして藪叢苔蝕して
峭立すると屏の如き處に一瀑其凹中より下る即ち七代の瀑なり七代
とは蓋し七重の訛ならん凡そ此瀑は毎層相折れて總て十有五丈今觀
る所は其第五層なり直下二十尺潭を壓し石を劈き直ちに奔りて第六
層に投ず凡そ此間は灌木叢條天に參はり地を覆ひ地又桶盆底に異な

七代の瀑

瀑呼の凄絶

らざるを以てや幽邃過清此に至りて益す甚だしく幽蔭靄深にして四
顧人影無し矧んや夜來の暴風雨猶ほ發作時なく狂暴迅烈也瀑水乃ち
壯溢して雷轟霆響滿山の萬木と相應じ憤々然として潭に跳擲し凄絶
壯絶なり之を須らくにして雨復た驟に至る因て急に瀑側を攀づ綾廣
の瀑に至らんと欲する也瀑側は本と路無し其全巖皆な樹根葛蘿纏繞
蒙絡して人其間に趾して以て纒に登降す可く急峻險巖手足と俱に歩
むと數町金毘羅祠下を過ぎて巖石の上に在る小き祠にして其旁に天
狗の銅像大小二有り又一の急坂を盡して亦一路の鬱然として谷に沿
ふに隨ひば路の窮まる處に復た一境を獲たり亦純石以て體と爲り瀑
其頂より墜つ高さ七代と相若き幅は一問有餘綫々として巖に貼して
而して下る其狀譬ひば一大綾羅を懸けたる如し問はずして其綾廣の
瀑たるを知るなり其側に登道有る者の如く以て其本源を極む可きに

急峻險巖
手足と俱に
歩む

綾廣の瀑

奥の院

似たり極めて急なり余乃ち望蜀の欲に禁えず勇を鼓して以て其處に
 就けば圖らざりき巖粉石壘積みて而して之を成したる者ならんとは
 未だ寸を進まざるに尺を退き幾んど頓踏せんとする者三五なり乃ち
 曰く既に斯勝を領せり何ぞ必ずしも其源を極めんと罷めて而して奥
 の院に詣づ奥の院の在所は又一峰にして前路に還ると三町更に左に
 登る其峯を男具那峯と曰ふ蓋し奥の峰の轉ならん奥の院は日本武尊
 を以て主と爲し景行帝の祠は別に之を建つ未だ頂に至らざるに一小
 祠の綺麗なるを見る此れ即ち其れ嗟乎武尊は天錫の勇智西征東討し
 て普天率土皇威爰に大に宣揚し國土爰に大に開擴す萬古誰か瞻仰し
 て歎慕し奉らざらんや傷ましい哉速水の難驚盟遠に破れて關々たる
 雌鳩一朝にして相失し確氷の東顧吾孀者乎の歎誰か能く歔歔流涕し
 て而して痛悼せざるを得んや默拜すると之を久しくして偶然背後を

日本武尊の憑吊

武尊祠の眺

景行帝の祠

竊に思ふ紅葉の秋

願みれば目下は山開け谷通じ眺囑豁然たり而して祠宇は正に東南に
 面す豈に山勢の然らざるを得ざるを以てなるか抑も亦尊の心志を料
 り奉り聊か以て英靈を慰めんと欲するに出でし者ならん此地は三王
 阪よりも高きと數十尺故を以て其眺囑する所幾んど三王と相同じと
 雖も其豁然として明媚なるに至りては確に數等の上在り幾たびか
 去らんとして還た止まる終に祠後を攀ぢて頂に至る此れ景行帝の祠
 の在る處其祠は武尊の祠に比すれば凡そ十の一にして且つ質樸にし
 て眺望無し山中の探勝此に於てか終る即ち山を下る一には則ち風雨
 を畏るゝを以てなり抑も此山此日經たる所は雜木叢生せり爾時竊に
 想ふ紅葉の秋は甚だ觀賞するに堪えんと今や錦繡十月なり知らず山
 光果して如何之を思ひば恍乎として魂の飛ぶを覺えざる也十月下旬
 記之

晃山探勝記

日光の勝たる鼎鑑すら且つ古より之を知る

一行一百四十人餘

大谷川の景

其山紫にして其水明に之れに加ふるに闕宮の莊儼綺麗海内無比なる者を以てす。晃山の勝爲る鼎鑑すら且つ古より之を知り聞く者をして延頸企足して殆んど情に勝えざらしむ。矧んや時深秋に屬し紅葉又太だ佳。雅客誰か一遊を意はざらんや。會ま吾校の生徒迫るに之れが勝情を探るとを以てす。乃ち晴を卜し客月念八日を以て發す。一行一百四十有餘人。午下九點鐘。咸な日光に達し旅邸小西に投ず。星明にして氣肅なり。明日も亦必ず雨ならざるを知る。翌日晨起すれば果して快晴なり。此日先づ裏見華嚴中禪寺等の諸勝を探る。旅邸を出づれば即ち大谷川なり。川の右涯は則ち闕宮。老杉森然たり。左は則ち丘陵崩崖として紅葉遠く天に連なり。而して川其間に澄々

荒澤の一の

裏見の瀑

焉として奔湍激昂し。已に尋常の勝境に非ず。心魂既に諸勝に飛越するなり。行くと一里なるとき。一道の急流北從りし。此に至りて俄に陥りて瀑と爲り。潭となり。雷轟電奔して。霈然として。千黃萬紅中を衝きて而して去る。此れを荒澤の第一瀑と曰ふ。荒澤は即ち裏見の瀑の在る所なり。裏見は夙に瀑背を見るの奇を以て顯はる。此れ其附錄餘興のみ。此れを過ぎて僅に五六町にして。山勢凹然として。彎入し。百千の老楓蔚乎として。溪を壓し。山を繞り。溪山窮まる所。巖腹嵌凹して。巨瀑猛然として。其頂自り墜つ。即ち裏見の瀑なり。瀑光楓光爛分。豎分として。以て相映發し。其溪上に柴を編みて橋と爲し。楓に翳して。之を望むが如きは。美觀實に極まり。嘗だに觀背の奇のみならず也。瀑は直下十餘丈入りて。而して其背に立てば。一大玉簾。山上自りして懸る如く。左右の壁に。又各一小瀑有りて。相對す。右なるは萬條の素絲を垂れたるが如し。因りて白絲の瀑と

晃山探勝記

裏見より中
禪寺等に行
くの途次

剛阪

屏風巖

劍ヶ嶺

般若湯方等
湯

中の茶屋

八〇
曰ふ左なるは二條相糾ふて而して下る乃ち相生の瀑と曰ふ觀賞する
と之を久しくす躡を回すと數町にして右折す即ち中禪寺及び華儼の
路なり其間も亦甚だ觀る可し楓樹他木と皆な愈よ錦を裝ひ間ま又之
れに反映するに松杉を以てし丹碧淺深五彩煥發し而して路其中に高
低屈曲し忽ちにして山腰忽ちにして水涯畫圖の中を行く如し荒澤を
距ると大約半里にして一路陂陁す剛阪と曰ふ之を降れば則ち左望稍
や豁にして紅濤彩雲の間に水有りて蜿蜒峯有りて點々たり而して茅
屋艸舍其中に隱見明滅し豆人往き寸馬來り天趣自から人目を牽く馬
廻しに到れば路溪流に沿ひて兩崖は峭壁千尺霜葉を被りて嶽巖とし
て翼立す屏風巖と曰ふ之を過ぎて而して劍ヶ嶺素練前山に懸る者二
大なる者は般若と曰ひ小なる者は方等とす中の茶屋は阿舍の瀑は我
れ之を知らずと雖ども谷を隔て、群峯悉く眼下に瑤躑瓊列するなり

劍ヶ嶺以往
絶の勝

華儼の瀑の
壯觀

實に見山第
一の壯觀

大抵劍ヶ嶺以往は坂路羊腸登るに隨ふて楓樹益す多く縦生横生して
參然として之れを夾み之れに増すに又他の霜葉を以てし淡黃濃紅山
と無く谷と無く綺紛繡錯して風烟染めたる如く一步一賞して乃ち杜
子紅於の説の果して吾を欺かざるを知るなり坂路既に盡き行くと數
町便ち華儼の瀑及び中禪寺と爲す岐有り華儼の路は即ち其左なる者
韃鞨の聲已に耳に達し足覺えず左りに馳すれば草茅茂密して千仞削
成せし處に幅大約四五間懸下幾十丈文に所謂一氣呵成の勢段なく落
なく滔々轟々として宛も迅雷般々として萬斛の猛雨相合集して急に
降る如く試みに其底を窺ひは窵として極まる所を知らず別に十二の
細瀑有り左交右絡して其中腹に見はる十二の銀蛇が相争ふて走り下
る如く唯だ山鳴り谷動き坤軸壞裂せんと欲するかと疑はるゝのみ實
に見山第一の壯觀爲り崖に隨ふて行けば老樹相翳し淺流其下に委蛇

中禪寺

補陀洛湖の
岨目

湖畔の名勝

大日堂
含納ヶ淵

たり即ち瀑の上流にして補陀洛湖自ら來る者なり其幽邃亦以て一顧するに足る。瀑自ら二町可りにして中禪寺邑。男體山を食ふて而して大湖に而す。湖は即ち補陀洛湖なり。晶々たる其水宛然。大明鏡の如く。汪洋激澗として之を望めば環湖皆な山。烟雲縹緲たるの中に紅於糝糊として。長障短嶽起伏頽頽し。高遠清閑夏時の適頗ぶる想ふ可きなり。之を聞く湖は東西三里南北一里にして沿岸に寺崎歌濱等の名勝有り。余の淺學寡聞にして而して又疎懶なる。曾て其所在を知らず而して又其所在を訊はず。吁。山靈水神は我に負かざるに而るに我は山靈水神に負く。其罪爲る。此湖の深さより深き哉衆をして角屋泉屋の二樓に就きて餐を傳ひしめ餐後二荒祠及び中宮祠に詣で。來路に就く。馬回以往は更に足尾街道に出で。大日堂を觀る。其境間淨。賞す可し。唯も規模猥々として。酷だ益景に似たり。其他含滿潭。其化地藏及び空海擲筆の書の信

田母澤園

霧ふり瀑

湯本、七瀑、
園宮

ずるに足らざるや固より論勿く其潭も亦徒らに巨石磊落にして急流空しく怒吼するのみ曾て風致の稱す可く姿態の觀る可き者無し。田母澤園は。池臺の設け樹石の布置佳は。則ち佳なれども。人工に過ぎて韻致無し。

次日も亦晴なり此日は歸京を期す。又旁近殘餘の勝を探らんと欲するや。蓐食して霧降瀑に之き而る後に園宮を拜して還る。細逕、綫の如く陟降上下し旅邸自ら東南に行くこと一里半。所澤村に到る高丘左に連り。平野右に開け前面に谷を隔て。數層の瀑布紅葉中に懸るを見る妍麗頗ぶる。愛す可し。降りて其下に就きて之を觀れば層々三十丈巖に貼して下る。度るに當時は水少し。秋霖春雨の日の若きは必ず應さに迸散四射し滄渤として降霧の靄有り。命名虚しきに非ざるべし。此れ即ち霧降瀑の大觀なり。若し夫れ湯本、七瀑等は他日を期す。園宮に至りては。余輩

八四
庸々の徒の能く寫す所に非ず蓋し其金碧熒煌輪焉奘焉として止だに
海内に比無きのみならず恐らくは坤輿に在りても亦殆んど比無き者
なる可ければ也丁酉十一月上浣胸臆を探りて之を記す。



函嶺修學旅行記

はこれ山の
遺跡

函嶺の地たる古昔鎌倉幕府以來關東唯一の關門にして遠くは承久年
間近くは維新の當時幕議官軍を扼せんと欲せしは皆此地なり寛治の
昔月明の夕新羅三郎義光が伶人豊原時秋に秘曲を傳えしも亦是地な
りと云ひ建武二年十一月左中將新田義貞が連戰連捷し足利を追ふて
至りしと云ふも亦此地に外ならず曰く北條氏五代の墓曰く豊太閤の
石風呂曰く新田義陸戰没の地曰く何曰く何其探る可き者鮮なからず
且つ山中到る處鑛泉湧出して風光も亦稱するに足り氣清くして景今
ま尤も觀る可く而して小田原及び石垣石橋の二山は之を往返に吊す
可く江の島の勝鎌倉の舊は之を歸路に探る可し今茲明治卅一年の修
學旅行地は必ず函嶺を執る可しと是れ吾中學校々友會が箱根に決し

天も亦人を
ぢらすい

喇叭一聲歩
喇叭々

たる所以なり但だ江の島鎌倉は雨に妨げられて過ぎるを果さず。會する者二百三十人分ちて甲乙の二隊と爲し三年生以上を甲組と曰ひ一年生二年生を乙組と曰ふ此れは概して幼弱彼は概して長健其脚力を量りて自から其行程と巡路とを異にせざる可からざる者有るを以てなり往復は三日を限り會費金一圓余は甲組に屬し五年級監督主任爲り令して曰く晴雨を論ぜず發程せんと偶ま其前日天大に曇る衆皆憂心沖々たりしと云此日十月二十二日。

二十三日半夜に蹶起し午前三時を竣ちて登校す此時を以て校内に集合するの約なればなり既に在る者數十人天を仰げば星月爛然たり皆な大に振ひ談笑器々たり三時半隊伍を整ひて新橋停車場に向ふ喇叭一聲歩調肅々として暗を衝きて行くさま壯且つ快なり。

豫定の如く四時五十分を以て新橋を發車す時に夜未だ曉に及ばず月

借問す、子
等は何を歩
みる

國府津

酒匂川

小田原の地
跡

菫藩の城跡

光蒼茫として天地一漠神奈川に至りて始めて明なり此間將に睡らんとして點頭する者既に睡りて他に倚れる者鼾聲雷の如く華胥に快遊する者鮮なからず借問す子等何を夢みる國府津にて下車す此れ古昔相模國府の在りたる所近旁十町許りに曾我里とて曾我兄弟の住所の跡有りと云國府津より二十有餘町にして酒匂川長橋町餘なり聞く古は冬季に非ざれば橋を架せざりしとア、今日明治の餘澤難有きとならざや九時に近き頃小田原に至る此れ北條氏が堂々乎八州に覇たりし之地東南は相模灘に瀕し而して西北は函嶺巍然として自然に東方の藩屏を爲す民政父子が豊關白の召に應ぜざりし之寔に偶然に非ざるを知る菫藩の城跡を訪ふ此れ菫と十一萬三千餘石の主たりし大久保氏の城趾群山糾紛として其西北を圍繞し地勢甚だ雄拔なり城趾は一步は一步より高く老松蟠し稚松蘆す其最も高き處に神廟一字有り。

城趾の勝景

石垣山、石橋山

國之寶在德

湯本

塔之澤

即ち大久保氏を祀れる者凡そ城趾の勝は山海一眸の中に聚まりて雄偉濶大。遠く來路を望む可し小田原を過ぐれば一水西よりす。早川と曰ふ。川の對岸に一帶の山脈西に走る所謂石垣山及石橋山なり。石垣山は天正年中小田原征討の際豊公が陳營せし所にして又嘗て(明應年中)早雲氏が小田原を攻略するの時牛角に炬して攻め登りし處なり。嗚呼興るも此地亡ぶるも亦此地國之寶在德不在險。吳子の言此に於てか愈よ。微有り。湯本に至る。四顧皆已に山にして杉烟樅嵐紛として軒に迫り燦然たる層樓。早川の滯流に臨む浴客の殷なる土地の繁盛なる推して知る可し。此れより五六町にして塔之澤。環翠樓に投息す。時に午前十一時なり。皆な餐を傳ひしめ休息せしむると一時間餘。衆をして隨意に名勝舊迹を探らしむ。第一は金湯山。早雲寺。即ち北條氏五世の墓の在る所。第二は玉籠樹蔭の二瀑有る處。第三は霧の瀑。

其一、霧の

其二、早雲寺の甲古

其三、玉籠樹蔭の二瀑

環翠樓の傍。早川に架したる橋上。川の上流に向ふて立てば對岸咫尺の地に飛泉兩段。滴々として素練を掛くるを見る。即ち霧の瀑なり。直下約そ二十尺幅三尺許りなるを上層とし下層は高さ此れより低くして幅は稍廣し。緩々灑々として樹間より降る。仰げば峻峰屏の如く萬緑之に被り俯せば川流箭に異ならず。礫磧として石を衝き地たる又壯とするに足る。湯本に返りて須雲川を渡り坂路一町許りにして早雲寺。北條氏五世の墓は凡て五基。薜苔斑々として衰蔓力なく羅絡す。嗚呼蓋世の英雄も死しては同じく一堆墳墓の主。四圍樹木葱々として寒烟彷彿し。涼草叢生す。墓石は各高さ四尺幅一尺許り。寛文十二年八月北條氏の遺孫北條伊勢守氏治が再建する所にして墓地中一段高き處に在り。石磴五六繞らすに石垣を以てす。踵を回し須雲川に沿ふて左折すると二三町にして一小園有り。山に緣りて設く。山は湯の阪山。翠崖峭絶の處に

九〇
 一。大。飛。泉。高。さ。十。二。丈。幅。十。四。間。の。間。銀。細。萬。派。拗。怒。鬱。勃。し。て。左。交。右。絡。し。
 或。は。劇。雨。と。爲。り。或。は。急。霰。と。爲。り。密。雪。と。爲。り。飛。沫。紛。々。然。而。る。後。に。淙。々。
 と。し。て。相。馳。逐。し。て。下。る。即。ち。玉。籬。の。瀑。なり。其。右。に。樹。蔭。の。瀑。萬。緑。叢。中。に。
 白。練。を。暴。布。す。る。と。十。五。丈。幅。は。甚。だ。狭。け。れ。ど。も。沛。然。と。し。て。飛。奔。快。瀉。し。
 中。道。に。し。て。兩。岐。し。岐。し。て。益。す。衝。激。雷。轟。電。狂。狼。雨。す。此。れ。や。一。頭。兩。脚。の。
 文。彼。れ。や。細。大。條。陳。の。法。なる。哉。而。し。て。園。内。は。則。ち。翠。蔭。蒙。密。に。し。て。苔。老。
 ひ。て。石。古。二。瀑。の。水。來。り。て。其。間。を。流。れ。瀾。々。たり。濺。々。たり。終。に。且。つ。滌。し。
 て。曲。池。を。爲。す。瑩。然。一。泓。游。魚。潑。潑。と。し。て。短。松。蟠。し。修。竹。伸。び。景。象。清。楚。に。
 し。て。人。を。し。て。襟。懷。洒。然。覺。え。ず。快。然。と。し。て。長。嘯。し。膝。を。抱。き。て。歸。る。を。忘。
 れ。し。む。此。日。秋。暑。流。汗。而。を。垢。に。す。霧。の。瀑。に。遊。び。し。時。余。其。下。層。に。於。て。面。
 を。洗。ひ。且。つ。合。嗽。す。何。ぞ。圖。らん。其。上。層。に。至。れ。ば。足。立。堀。内。の。二。子。赤。裸。々。
 と。な。り。て。潭。中。に。渾。身。を。洗。滌。し。居。ら。ん。と。は。相。見。て。啞。然。と。し。て。大。笑。す。十。

二時三十分。復た隊伍を整ひて此地を發す
 此れよりして足指連りに仰ぎ宮の下に至るまで大凡二里の間は峰巒
 送迎して徑路百折し大概窈然たる深溪に臨む云ふ春は踟躕花此溪崖
 に開きて猩紅流水と相映じ雲耶雪耶の櫻花又其山腹に爛發して眞に
 白雲靉靄たるの觀有り秋は滿山紅葉して錦山繡峰極目際無しと惜哉
 今は固より春に非ず而して紅葉も亦未だしなり之が爲めに痛憾す行
 くと一里餘にして一茶店を得たり富士見亭と曰ふ壘巘龍盤するの上
 雪既に被むりて白扇を倒にしたる如きの富岳を望む斯名有る所以な
 り凡そ函嶺七湯とは曰く塔の澤曰く湯本曰く堂ヶ島曰く蘆の湯曰く
 宮の下曰く氣賀曰く底倉何れか遊賞するに足らざらんや然れ共溪山
 の景色の通じて觀る可きに至りては宮の下と底倉氣賀の間に如くは
 莫し山彌よ高くして愈よ逼り溪益す深くして崖倍す急に危橋目眩じ

堂ヶ島

瀑布心飛ぶ者一再ならず而して夫の太閤の石風呂新田義陸朝臣戦没の地も亦底倉に在りと云。但だ豫期の路順に非ざるを以て過ぎらず。堂ヶ島に至りては萬山の窮谷に在り乃ち風色の幽邃を以て優る。夢窓國師閑居の跡松ヶ岡遊園等有り殊に一顧す可きは明星ヶ嶽の穴居なれども亦其旁路なるを以て果さず。宮の下の中央より徑ちに小涌谷に赴く凹凸陟降惡路十三町にして達す。時に午後二時三十分乙組は此に宿す。甲組は此れより猶ほ一里。蘆の湯に登りて止む。蘆の湯は松坂樓松坂萬右衛門又鶴鳴館と號す。小涌谷は三河屋榎本恭三又鳳來樓と稱す。風か鶴か我は唯だ諸子が將來益す己を慎み人と爲りは鳳の如く壽は鶴の如くならんとを欲するなり。此日の行程甲組は六里乙組は五里松坂屋尤も用意周到にして待遇懇懃なり謹みて謝す。

喇叭一聲

二十四日。甲組は午前六時三十分を以て亦喇叭を吹奏して發足す。正

蘆の湯の松坂樓と小涌谷の三河や

正に是れ鐵笛吹き開く巫峽の雨

藥師堂

北山門下の吟詠

に是れ鐵笛吹き開く巫峽の雨。蘭舟解破す洞庭の秋。濛々たる濃霧を冒して先づ元箱根に向ふ。昔文化庚午七年なりの秋山本北山門下を拉して此地に浴し文有り詩有り皆な一の碑石に刻して此地の舊藥師堂の跡に在りと云ふ。云ふ。藥師堂の跡は松坂樓の旁にして樓の三層樓に傍ふて登り口有り昔は此堂に持明院の書及び英一蝶の扁額有り其境内に名碑甚だ多く又十六羅漢有り其製作の年月は詳ならずと雖ども若深く閉ぢて古色蒼然みな考古家操觚者の一顧す可き者なりと。北山門下の此地の詠に曰く

涼氣生時雨始收。趁風雲脚去如流。東南一角山才缺。展出蒼波萬頃秋。淡齋 佐羽 芳
數聲杜宇夢覺間。起倚欄檻夜欲分。最是雙峰奇絕處。一峰吐月一峰雲。愚庵 木 壽

函嶺修學旅行記

二子山養壽園

曾我兄弟の墓

虎御前の墓

多田滿仲の墓

此れ用て此地の勝記と爲す可し。二子山養壽園路の左に在り。詩中に所謂雙峰とは即ち是れ。今は公園たり。此山海拔三千三百有餘尺。相武駿遠參の諸山より以て房總の諸山を望む可く怪岩峙ち奇石横はり樹木蔭苔を着け枝致甚だ雅なる者多しと。前途陟降の鮮なからざるを思ひ登覽せずして去る。往くと數町にして曾我兄弟の石塔二。髮塚と曰ふ。亦道の左なる小笹の中に在り。中座に地藏尊の如き者を彫り臺石には一の大なる梵字を刻みたり。相傳ふ兄弟の鬚を埋めし處なりと。嗚呼其れ然るか。其れ然るか。一片孝心數行涙。學生山下二孤墳。我れ坐るに織田鷹洲の詩を憶ふ。此れと相並びて其傍に稍小き者一つ。虎の墓なりと云ふ。見金夫不有躬。方今の輕薄婦女子。少しく愧ぢて改むる所有れ。又一町許りにして多田滿仲の墓といふ者有り。高さ一丈餘。道の右に立つ。其臺石の面に正安二年八月二十一日の文字有り。此れ滿仲の卒年月。長徳三年八

弘法大師作二十五菩薩
同作石地藏
精進ヶ池

徳有れば必ず鄰有り
風穴、頼朝御状石

月二十七日を距ると三百有餘年なり。正安は後伏見の時にして長徳は一條帝の時なり。又一面には文和四年三月一日の八字微に見ゆ。此れ正安二年を距ると又五十五年なり。考古家乃ち曰く此れを滿仲の墓と爲すは甚だ謂れなし。是れ或は古昔疫癘の供養塔ならんと。凡そ此間は曰く弘法大師作二十五菩薩道の右に一の石標有りて之を表す。曰く同じく大師の作の石地藏二。一は道の左。巨巖に刻す。曰く精進ヶ池。滿仲の墓の後方に在り。隣族絶て生ぜずと事の浮屠氏に關する者頗ぶる多し。但し大師の作と稱する如きは信じ且し然れ共巨巖の石地藏の如きは慈容端整にして妙相具足し。其少しく俯して趺坐するの狀。人をして殆んど合掌せしめんとす。因て謂ふ。今や人性善を具ふ。徳有れば必ず鄰有りとは信なる哉。其他風穴。頼朝御状石。亦知らずして過ぐ。詳しく探らんと欲する者は優に半日の興有る可し。石地藏より十町許りにして

二子の茶屋

二子の茶屋。急坂に臨みて左は瀝々池を瀦したる二子山麓を瞰下し右は兩山相廻合せんとするの間に蘆の湖を眺望す既にして元箱根に達して舊關趾を訪ひ又箱根驛を訪ふ。踵を回すとき乙組の來るに遇ふ。乙組は午前六時發にて余輩の後を追ふて此に至りし者亦關趾等を訪はんと欲するなり足容巽鑠として隊伍整然たり然るに此日甲組の士にして乙組に加はる者前後十六七人我輩聊か怔忡たらざるを得ざるなり青木講師(乙組監督主任)乃ち曰くドウダ我乙組の立派なとと眞に然り。

「逸彼華岱維岳之峻巖々高大配天作鎮函嶺の天險を利用して一大關門を構ふ想ふ昔此關趾榮戟如何に森然たりしか關鎖如何に轟々たりしか過ぐる者皆な膽落ち氣肅せしといふ箱根驛の東一町ならざる處の道の右に瘦松一株あり之と相對して石垣一堆あり即ち其廢趾なりと。

舊箱根關趾

昔箱根驛の今

芦の湖水

超然として
我神逝く
舟中の望は
果して如何

廢毀せしは過ぐる明治二年なり箱根驛は元箱根と相距ると十町許りなり此れ昔は東海道五十三驛中の第一名驛叱々たる警蹕の聲參勤交替する函西の諸侯の輿影馬聲日夜絶えざりし處なりしを今は則ち茅屋荒陋なる孤村冷落盛衰榮枯は獨り人の身の上のみかは元箱根に還りて松坂樓の支店に憩ふて湖水の眺望を貪る此れ函山第一の景勝也鮮淡畫きし如き峰巒倚疊して其周圍に起伏縈廻出入し東西廿町南北一里十三町の湖面深泓一碧瀟々洒々として而して離宮而して富岳富岳は萬古の秀色玲瓏として湖面に倒映し離宮は縹緲として塔島半島の上翠樹蒼梢の表に裝點す嗚呼佳なる哉超然として我神逝く陸上の眺め既に斯の如し舟中の望は何如ぞや便風に帆を揚げしに四山皆走る余子誠と白を浮けて絶叫し舟子をして少しく棹を緩にせしむ忽ち見る奇峰舟に墜つるを舟子曰く是れ駒ヶ岳なりと冠峰孖峰其左右に

日下勾水の
汎瀟湖記

峙し環湖の峰巒突起萬狀。半は皆な水に入りて僅に其頂を露はし島の如く嶼の如く詰山すると擣の如く而して水深くして底を見ず。一碧萬頃。宵漢に泛ぶ如し。此れ日下勾水の汎瀟湖記に記する所。豈にたゞ峰巒の景のみならんや。聞く老樹奇巖水を壓して欹倒するなど一層の觀有り。舟は湖尻に達す。舟行凡そ二里。賃銀一艘金一圓。但し一人にても一圓なり。箱根神社。祠は山趾に倚りて湖水に臨み。磴道百級。老杉千章。壇壝森然として自から人をして肅然たらしむ。苔蒸したる石の玉垣の纒に完きにも推し測られて今は往昔。郡府時代の隆盛なしと云ふ。と雖も丹殿宏麗にして高聳峨々たり。拜し畢りて甲組は更に湖の東北涯に沿ふて進む。是に至りて乙組と全く別路を取る。別に大涌谷の奇觀を探らんと欲するを以てなり。里程湖尻までは約一里半。又十五町にして婁子温泉。又八町にして大涌谷。湖尻までの間は篠竹夥しく道の左右に在

箱根神社

弱足隊弱足

元箱根より
大涌谷に至る
間の二景

り古來之を刈りて京都に送り煙管のらう竹に用ふ所謂箱根竹とは是れなり。と。婁子にて晝餐する時吉田久造。關口亶等の五子遅れ馳せに追ひ至る。五子は元箱根にて乙組に加はりし者なり。曰く乙組の徒輩余等を嘲りて弱足隊々々々と曰ふ。憤慨に堪えず願はくば依然甲組たらしめよと。衆覺えず噴飯す。併し兎に角引き返せしはいらい者なり。此間景色の稱す可き者二。曰く將さに湖尻に到らんとする處峻峰。此に至りて湖に逼り右は則ち層翠疊綠。屹として空際と相接し左は則ち湖光激澗。千尺の斷崖に縱生横生する松翠楓紅の間に隱見する。是れ一。婁子より登ると六七町。坂路既に緩にして硫氣已に鼻を衝く處。顧みれば芙蓉峰巍々然として萬木の表に跨る。之を他の衆山の上に亭々たるに比するに其千仞削成の觀。八面玲瓏の美。特に壯大にして明媚。眞に宇宙の名山たるを覺ふ。是れ二。一鼓して大涌谷に至る。

國嶺修學旅行記

大涌谷(或稱大地獄)

大涌谷とは湖の西北に聳ふる冠ヶ嶽の北腹より始まれる一大湧谷。大凡十二三町の間の總稱なり。硫黄湧き温泉迸出するを以て爾か言ふなり。全土固より不毛にして。焦石足を妨ぐ。地質腴滑頽墮にして。色或は青く或は白く或は黄にして。處々に湧出する硫黄は白烟青烟蓬々として昇騰し其水も亦硫黄質を含みて青く湛えし者有り。鐵氣を帯びて赤く流るゝ者有り。石灰の如く白く流るゝ者有り。熱湯混々として溪流には妄りに足を投し巨し。大涌谷とは近年の改名にして昔は大地獄と稱せしとかや。名は實を見はず。世俗に傳ふる地獄變相の圖に彷彿たる其狀況混々たる熱湯は即ち是れ焦熱地獄と謂つ可く。赤く流るゝは即ち是れ血の池地獄と稱す可く。針は無けれども焦石時に足を刺すは即ち是れ針の山に譬ふ可し。賽の河原とさへ名づくる處其頂に在り。何人のわざくれか。小石を積み疊ねて幼き亡者の勞苦を寫せしむはれ。世の學

地獄變相の圖に彷彿たり

小涌谷三河屋の眺望

者が地獄變相の圖は材を火山に採りし者なりと云ふは蓋し信なるべし。此日も亦快時にして時は正に午後一時なりしが細雨蕭々たるの日若しくは暮色冥々たるの際ならしめば定めて毛髮悚然たる者あるなる可し。路は此れより降る。甚だ險惡にして。登る者は一步一喘す。午後二時半に。小涌谷に至り亦三河屋に投ず。淺間鷹の巢の諸山其右に趨き。明星明神の諸岳其左に流れ。宮の下より宮城野に至るまで皆な朝霧暮烟の中に見る可く而して樓前數百步。丘に倚りて山を爲し。水を引きて瀑を墜し池を作り。春華秋芳盡く備はる。函山の温泉場中眺望の開豁と庭園の廣大とを兼有すると此樓の如きは蓋し鮮なかるべし。此日甲組の行程は五里。乙組は六里にして塔の澤の環翠樓に投ず。蓋し乙組は元箱根より來路を蘆の湯に至り。左折して湯の花澤温泉の道に入り。笛塚を右に見。小涌谷に降りて還りし者なり。笛塚は即ち義光時秋が秘曲を授

笛塚

函嶽修學旅行記

受せし處。但し信否は知る可からずと云。我は惟だ諸子が其厚情と篤學
とに感ぜられんとを冀ふて已まざるなり。

二十五日。陰雲冥合す。小涌谷發は午前五時五十分。纔に宮の下を過ぎ
しときより雨漸く至る。立品如岩上松。必歷千百歲風霜。方可柱門堂而成。
大厦。櫛風沐雨も亦修學の資に非ざる莫からんや。衆皆な軍歌を奏し。勢
堂々として進む。唯だ想ふ乙組の諸子定めて困憊を極むるならん。何
ぞ圖らん。午前十時早く既に國府津に到らんとは。湯本に入りし時。雨俄
に大也。乃ち三十分の休憩を許す。衆即ち争ふて名産湯本細工の販賣店
に入る。一には雨を避け一には家づとを購はんする也。此れぞ誠に一舉
兩得の方法。已にして八時雨猶ほ已まらず。衆因て油紙を買ふ。油紙初め十
一錢と稱せし者忽ち騰りて十三錢と爲り十五錢と爲り終に十七錢と
爲りしと。洛陽の紙價を貴からしめしは昔に聞きしも箱根山の油紙を

櫛風沐雨も亦修學の資也

雨を名産の賣店に趣く誠の一舉兩得の法

箱根の油紙の價を騰貴せしむ

騰貴せしめしは此行蓋し嚆矢なるべし。爲めに一笑す。已にして油紙盡
く。因て請ふに委せて馬車に搭せしむる者六十三人。余は徒歩隊の殿後
と爲りゆく。遅れたる者疲れたる者を扶けて十一時十分に皆な國
府津に會して。瀛車に投じ新橋に還りて相別る。此行諸子皆な善く規約
を守り命令を遵奉して大に吾中學の名譽を發揚する者有り。余鹽職を
本校に奉ずる者誰か欣然快然たらざらんや。爾ふ來秋を待ち復た諸子
と偕に之を行はん。戊戌十月三十日。其規約は左の如し。青木講師の
定むる所なり。

來會者の規約

修學旅行の主旨

修學旅行の主旨たるや。平素校内に於て爲し得ざる學事上の探究を
成し。兼て艱難辛苦に堪ふるの習慣を養成するに在り。故に此行に加
はる者は能く此意を體し。行路の難惡。宿泊の不便。若しくは旅亭の冷
遇等。其逢ふ所益す多ければ其學び得る所も亦益す多しと覺悟し不

來會者の覺悟

來會者の注

服従

尙ほ注意す
可き件々

其一、旅行

其二、後衛

其三、投宿

撓不屈、忍耐、精勵せんとを要す。此行、他諸學校の所在地を通過するを以て、一層、我校の名譽を高むるに注意し、苟且にも之を汚損する如きと有る可からず。此行、又軍隊の式に依るを以て、風紀、軍紀を嚴守し、秩序を重んじて、級長、分隊長に對する服従は一層、嚴格ならざる可からず。尙ほ注意す可き二三の要件を言はん。

旅行中は、風土、飲食物の異なるべきを以て、各自の衛生に注意す可し。行進中は、路人の妨害と爲らざる様、通常道路の右側に傍ふ可し。行進中は、漫りに高聲を發すると有る可からず。使用又は草鞋の穿替等は、必ず休止の時に於てす可し。狼りに人家に立ち入りて、湯水を請ひ又は、飲食物を購求す可からず。後衛は、風紀の責に任じ、脱列者を本隊に復歸せしむるに勉む可し。之を寛假すると否とは、規律の張弛に關するを以て、後衛は嚴なるを要す。旅舎の待遇、冷淡なるか又は不都合の

其四、就寢

其五、非常
の用意

其六、散歩

其七、級長
分隊長

事有りとも決して、不法の所業有る可からず。疊、建具、其他器具を損傷せざる様、毎に注意す可し。旅舎の者を狼りに役使す可からず。投宿中、高聲を發し又は、喧嘩々間敷き所業有る可からず。入浴及び食事等は、必ず所屬監督主任の指揮に由る可し。就寢後は、最も靜肅にして、決して他の安眠を妨害す可からず。投宿中、非常に際するとも、混亂を來さざる様、各自、携帶品に注意し、常に之を整頓し、置く可し。散歩は、必ず學友と共にす可し。而して、級長、分隊長は、部下に非違者有る時は、假借するとなく、之を監督主任の教員に申告す可し。

晝島鎌倉金澤修學旅行日記

未見の書籍
未見の山川

待てば甘露
豈嘗つて生
んや
かざるを得

「男子家に在りては未見の書籍を閲んとを思ひ旅に在りては未見の山川に遊ばんとをおもふ」とかや江の島鎌倉金澤は皆予が嘗て一たび過ぎりし所なれども一瞥匆匆に足跡を印せしといふに過ぎず尙ほ未見の山川に屬したり心魂飛越して必ず再遊せんと欲すると茲に年有り幸なる哉我校友會今茲己亥六月三日會ま此地に修學の旅行を行ふ余因て奮つて筆を裁せて往く此行は日數は二日鎌倉の材木座なる光明館を宿處とす惜むらくば其間大半は雨なりき是を幸中の不幸と爲す

三日 午前二時に衾を蹴りて起きたり戸を排すれば星斗爛然たり神乃ち先づ勇なり四時五十分に乗皆な新橋停車場に集りて火輪車に投

蔽ふ所の物
有れば物皆
如斯

道途を人等
さの比較

ず時に天は已に明けたれども太陽は未だ見はれず濃霧濛々として山走林回の靚なく四顧唯だ蒼茫たり蔽ふ所の者有るときは物皆斯くの如し品川大森を過ぎ川崎を經鶴見神奈川より横濱に至りて下車し路を磯子に取り午前八時に杉田に達す凡そ此行の路は随つて行けば随つて其觀を異にす磯子より此に至るまで一里有餘は路全く海に瀕し此れより能見堂に出で、金澤に至るまでは路悉く山中既に金澤を過ぎて鎌倉に及ぶまでは路多くは村落而して鎌倉以往は更に瀕海に乘ぬるに江の島の風光明媚を以てす余因て衆に謂つて曰く夫れ詩の文と皆な平板にして變化なきを厭ふに非ずや又千篇一律にして妄りに陳套を襲ぬるを惡むに非ずや止だに是れのみならざるなり山にして高低起伏なくんば其山觀るに足らず水にして曲折出入なくんば其水稱するに足らず惟れ人の日用に於けるも亦然り人の事を爲す變化な

磯子の花菖蒲園

ければ必ず倦む。飲食の如きも常に同じければ終には厭ひ到處其觀異ならざれば即ち倦厭の情に禁えず此行路の如きは豈に人をして倦ましめざるの好行路に非すや而して又豈に人たる者の宜しく法りて以て事に當り世に處すべきの好軌範に非ずやと磯子に花菖蒲園有り開花方に四五分なり紫なる者有り白き者有り廣袤數十畝の中綺錯絢爛譬へば紫の燕子飛び白の睡蝶止まる如し浴沂風霽の閑遊者は一顧して可なり杉田に至りては夙に梅花を以て名有るに負かず戸々皆梅樹有り樹々皆疎瘦老怪にして槎枒たり佶屈たり寒葩冷蘂雪を粉し珠を飾るの時は光景果して如何ぞや一茶肆に小憩して去る村端より直ちに山なり一路宛々として林樹交互するの間を紆餘陟降す此日生徒の會する者總て二百五十七人にして其被むる所の帽概ね白布を以て之を覆ひたるを以て宛も數百の圓形なる大白花の燦としてゆく路

杉田の梅林

大白花路に争ひ開く

能見堂

巨勢金岡郷筆の松

能見堂、三溪翁の記文すの如くなら

に争ひ開く如く林縁樹翠と相映發し亦一奇觀なりき大約一里半にして能見堂なり此れを金澤の始と爲す堂の傍に老松一株天矯として雲漢を凌ぐ所謂擲筆の松なり(俗説に巨勢金岡此に來り金澤八景を描かんとして成らず嘆稱の餘り筆を擲ちたる處と)菊池三溪翁の記(從能見堂眺金澤八勝記)に此堂は山を負ひて海に面し締構雅潔なりと云へども今は然らず陋然たる山上の一小屋のみ又一沙彌有り喋々として指説すと爲せども此れも亦然らず矧んや其八景たる平瀉の落雁野島の夕照稱名の晚鐘洲崎の晴嵐内川の暮雪小泉の夜雨瀬戸の秋月乙艦の歸帆は是れ皆な各其時有り其時に非ざれば之を得可からず又各其處有り其處に就かずして之を領するとは殆んど能はざる所決して一時一處に併せ觀るを得可き者に非ず而るに翁の舞文に巧なる以て併せ觀たりと爲す文の爲めに實を誣ゆ文人の弊なり然れども嵐光水色一

關に瞭然として回汀山灣繡時綺錯し悉く寸眸尺幅の中に集まるといふに至りては信なり惜むらくば天色時に已に變じて雲翳々遙光遠景皆模糊として人をして空しく其景勝を盡すと能はざるを憾ましむ。堂主其勝記及び諸る遊客の詩歌を藏す其中の龍歌に

八景のながめは眞に氣に入れど

入らぬはばが茶を酌むなり

と蓋し茶を侑むる者老女なればなり客舎の主婦嬋妍たるときは酒も亦旨きを覺ゆと云へる西諺も憶ひ出されて覺えず一喙を發したり十時過ぎに稱名寺に達し衆をして休憩し且つ餐を傳ひしむ

稱名寺は金澤山と號し龜山天皇の勅願所にして北條越後守平實時之志を承けて其子顯時の創建する所に係り有名なる金澤文庫所在の地たりし金澤第一の名勝にして眞言律宗別格本山の門榜儼めしく朱塗

咄。咄。俗物。客舎の主婦。如何せんとする

龜山帝の勅願所眞言律宗別格本山金澤山稱名寺

今の金澤文庫
庫背の巨觀

古の文庫跡

顯時の人々
爲りを論ず

り草葺きの門構え先づ人をして北條氏全盛の比ひを想はしむ門に入りて數十歩未だ仁王門に至らざるに右に近時の新築と覺ゆる家有るを見る即ち今の金澤文庫なり文庫の左に丘有り丘の上に亭有り登覽すれば海山の全勝大略眼に在り夕照の野鳥歸帆の乙艦尤も善く觀る可し別路を取りて降りて仁王門内に出づれば梅樹數十株あり蓮池を繞り石碑一つ池畔に立つ金澤文庫故地之碑なり其左のかた數十歩に一の洞門を得たり寺僧云ふ此舊と文庫の通路にして文庫の趾は實に此洞外の田圃是れなりと意ふに馬上天下を得可けれども馬上天下を治む可からず顯時豈に此に見る所有りしか天下第一たび定まるや馬を華山の陽に捨て牛を桃林の野に放ちたりしに倣ひて首として昌平國龔を創設し以て四海の文運と士氣とを鼓舞振作す徳川家康は斯くの如くして以て十五代三百年の繁榮を保ち豊臣秀吉は斯くの如くせ

ずして爲めに三代數十年なる能はず我れ此に於てか大に顯時の人と爲りに服せずんばあらず而して又聊か北條氏の末路に見る所有るなり夫れ元弘三年の鎌倉の役たるや九代連綿の後なりと曰ふと雖も一夫高時實に四海の怨府たり而して幸に一門の乖離無く東勝寺中八百の殉死者を得たりし所以の者は豈に此一道の文脈亦與りて力有りたるに非ざるを得んや甚ひ哉文化の國家に關するの大なるやと已にして十一時急に寺を辭す天色彌よ悪しく雨已に點々たるを以てなり行くこと數町にして路水涯に出づ山青く水白く山は水を繞りて水と相出入し水は山を離して山と相交錯し近くは琵琶島の辨財天祠松林長く水中に出で遠くは三浦岬の遙翠淡裝漫く天に連る矧んや青松緑楊樓を擁して水に臨み亭を抱きて山を負ひ一望縹緲として細波微瀾拍々として岸を打つこれを金澤村宇洲崎の矚目と爲す所謂洲崎の晴

嵐の在る所なり古人擲筆の事未だ必ずしも誇誕ならざるを見るなり金龍院前を過ぎる九覽亭の在る所なり其亭は院内の小丘の海中に突出したるの上に立てり一沙彌來りて東北に面し喋々と指説して曰く面に當りて巍乎たると山の如きを野島と爲す倒影樹に在り蟹戸網を晒すの景佳なり其左を落雁の平瀉と爲す落雁は實は雁に非ず人の群りて海藻類を採るの狀之れに似たるに名づけたるなり又其左は即ち洲崎製鹽の期に白沙を平布して水を撒する時は自ら是れ晴嵐の景其後に當りて蒼海茫茫として白帆驚の如く鳧の如きは乙艦の歸帆夕陽斜に射て白帆影を弄して還るの時觀る可しと縷述して休まず此れより前三日余及び池田守吉氏會務を以て來りし時此に登る余沙彌の指す所に隨ふて之を觀るに環山擁水は自からは是れ此亭盆池の物たり乃ち其八景の勝の指顧一目の中に在るは則ち之れ有り然れども其山容

金澤の勝は
洲崎よりす
可し

期比奈の被
通し

洗刀泉、廣
常の塔

雨の進、
慷慨

我輩亦豈に
風雨に敵す
るの勇なく
して可なら
んや
三百の濡鼠

水態は終に洲崎よりするの雅にして而して曠如たるの比に非ず訪は
ずして徑ちに鎌倉に進む。一里許りなるとき路高丘を横斷す。神割鬼削
兩壁數十尺なり。期比奈の截通しと云ふ。鎌倉の名勝舊跡は東は則ち此
に始まる。此れ已に洗刀泉及び廣常の塔の在る所。之を降れば即ち鎌倉
の故墟なり。時に既に零時三十分餘。雨益す。至る此れより先き既に全隊
を二分して以て行進に便し。四年五年之れが先たり。此に至りて其衆皆
な電奔光走し。名勝舊跡も物かは皆な唯だ後れんとを之れ恐る。前隊已
に斯くの如し。後隊も亦多くは之れに倣ふ。夫れ鎌倉は百年霸王の地。三
姓負隅の趾。此行の尤も目を寓せんと欲する所なり。古に稱す關東八州
は能く海内に敵し。而して鎌倉は能く八州に敵す。と今や我輩八州に敵
するの勇を要せず。豈に亦風雨に敵するの勇無くして可ならん
や。慚愧々々。午後一時二十分に光明館に投ず。三百の濡鼠。衣帽皆な滴々

突然一大滑
稽演劇

駭浪暴くし
て意氣益す
昂る
稻勢川の畔

極樂寺阪の
北條重時の
墓
大館主従の
墓
七里ヶ濱

然。一時に喧鬧して浴衣を館人に求む。浴衣忽ち盡き。印袷纏を被る者。婦
人の服を借る者。夜着にくるまる者。千態萬狀。宛然一大滑稽演劇。晚來強
風雨に加はり。由井ヶ濱邊。濤聲其れ凄たると終夜。

四日 午前八時に出發す。雨師風伯。曉來略ぼ威を斂め。衆先づ欣然たり
會ま。且つ江の島に往かんとして。路を由井ヶ濱に取る。駭浪猶ほ暴くし
て。凌濤疊躍し。衆の意氣益す。昂る。路を横ぎりて。稻勢川。一微流のみ。云ふ。
新田義貞の鎌倉に入るや。此ほどよりより上陸せりと。其果して然るや否
やは余。今ま之を斷するの力なし。想ふに當時鎌倉の存亡は一に繫りて
三道の勝敗に在り。此れ其れ或は忽にせし所有りしか。巖道を歴たり。史
に所謂極樂寺阪なり。阪を過ぐれば。右に極樂寺。寺に北條重時の墓有り。
道の左に大館宗氏主従十一人の墓。蓋し主従戰死の地ならん。路。繼ぎて
海遊に出づ。七里ヶ濱と爲す。寶徳二年。足利成氏が上杉憲忠と戦ひたり。

稻村ヶ崎

懐古の

一一六

し處而して其東端は即ち稻村ヶ崎なり築堅千尺截然として海角に立つ。想ふ昔元弘三年中黒の旗倏忽八州を風靡し十有二萬の大元帥月下刀を投じて此に海神に禱る是れ亦實に鎌倉を俯瞰するの恰好地なり。余此に於てか俯仰感慨措く能はず急に隊を離れて獨り其蹤を探る。榛莽徑を没して徑迷々羊腸百回して始めて其巔に達すれば千松競ひ秀でい萬籟争ひ號ぶ正に是れ旌旗林立して千軍突喊の聲なるかな。四十分に江の島に達す。

江の島

江の島は古より東海の勝地と稱せらる。蓋し其地たるや四周皆な斷崖絶壁にして相模灘三十六里洶々として脚下に鳴り試みに茶肆酒亭の欄に倚れて眺望せんか東望は遠く三浦より以て房總の諸峯に到り南は翠螺一帯伊豆の大島浮び西は白扇倒さまに懸ると云ひし芙蓉峰箱根の群巒を率ひて之れと相對し北も亦大山丹澤山等の山々近く相連

福石

杉山檢校の
立志

白菊を弔す

り光景實に雄大なる者有れば也唯だ其俗狡獪にして必ず人をして財を散ぜしめんと謀る。是れ甚だ厭ふ可し邊津中津の兩祠を順拜し東崖の一茶亭に就きて憩ひ衆をして隨意に遊賞せしむ。周廻僅に二十丁の一小島にして到る處數百の隊を成し難ければなり邊津神祠の下に福石といふもの有り。其石形ち臥牛の如し相傳ふ昔時檢校杉山和一此島の辨財天祠に禱り一日偶ま此石に躓づきて鍼管を得。其技此れより自から神將軍の殊寵を蒙むるに至りしと。之を聞く檢校は遠の濱松の人天資不群にして幼にして大志有り不幸にして十歳のとき明を失ふ檢校憤然として更に鍼醫に志し。年甫めて十七なりしとき斷粒三七日以て此島に禱れる人なりと精神一到すれば巖をも穿つ可し何事ぞ庸俗類墜萎靡。兩目能く物を見る者其れ鑑みざる可けん哉。白菊を稚兒ヶ淵に弔して龍穴に至るうきことを思ひ入り江の島かげに捨つる命は波

可歎白袴隊の追逐

の下くさ嗚呼是れ白菊が自休藏主に遣せし二首の一なり白袴隊の追逐古今と無きぞ情けなし近日都下の學生に美少年を弄するの風大に流行し其徒數群あり互に聲息を通じ皆な白袴を穿ちて以て標と爲し美少年を見れば則ち迫りて己の意に隨はしむ號して白袴隊と曰ふ藏主は鎌倉の建長寺の廣徳院の僧白菊は雪の下の相承院の離僧姿貌秀麗藏主の懸想する所と爲り遂に入水して肯て従はざりし者なりと云此日は波暴くして龍穴に入り叵し十二時に踵を回して復た鎌倉に入り御靈宮に鎌倉權五郎景政の力石を弄ひ長谷の觀音堂に東南一望の勝を貪り大佛に腹中を穿ちて一錢を投じ午後三時遂に雪の下より鶴ヶ岡の八幡宮に詣る鎌倉山の腰に當りて飛甍高廊宏壯華麗海内の大祠と稱するに足る

夫れ鎌倉の地たる剛健質朴風を成し數百年間四海の政令の自て出で

鎌倉の俗に八幡宮

鶴ヶ岡八幡宮

大佛

長谷の觀音

權五郎景政の力石

八幡宮と舊都の皇城の位置

たる所城東鎮撫の大將の常に據りたる所なりしに係はらず其神社佛閣は華麗と云はんよりは寧ろ朴素堅牢の風尙有る中にて此祠獨り堅牢と華麗とを併せ有し結構の壯大なる金碧の燦然たる惟だに鎌倉無比の偉觀たるのみならず又誠に海内の大祠と稱するに足るは何ぞや且つや其祠左京を東にし右京を西にし朱雀大路直路一條其間を貫きて以て平安を中分するの本たるの地に當りし舊都の宮城の如く祠の面する所直道十餘町以て由井ヶ濱に達しまさしく鎌倉全邑を中分するの本たるの地に在るは何ぞや我れ此に於てか喟然として嘆ずる所有り曰く嗚呼頼朝が子孫の爲めに神祐を祈むると至れり盡せりと謂ふ可し唯だ其猜疑忌刻なる自ら其手足を斷ち其蟠根を絶ちたるを以てや其身一旦死すれば六尺の孤忽ち何の處にか安らかなる天に私覆なく地に私載なく禍福は究竟己に由る豈に神に由らんやと一拜して

頼朝嗚呼策を失せり

公曉刺實朝處
靜女演舞の處
鎌倉及大塔宮の土窟

階を降る。階の左に銀杏樹。老大牛を蔽ふ。公曉が身を潜めて實朝を俟ちたる處。右に若宮。其拜殿は即ち源豫州の愛妾。貞烈松柏の如き。靜女演舞の處。大塔宮。護良親王を祀れる鎌倉祠及び其土窟は此れより東のかた五六丁に在り。二説に。此土窟は親王の幽せられ給ひたる所に非ずと云。今暫らく從來の説に従ふ。史を按ずるに

土窟の隈古

今也。日月非照。山川非載。臣不敢復有望於世也。儻幸宥死刑。削籍歸佛。惟陛下憐察之。涕隕心慚。不終所欲言。嗚呼。是れ親王の當年の上書に非ずや。古に云へり。困窮而呼天。疾痛而呼父母者。人之至情也。今や親王。赫赫たる萬乘帝王の貴種。烈々たる社稷再造の功勳を以てして。父を呼び母を呼びて。而して嚙えられず。空しく斯悲痛の辭を吐きて。終に此に非命に斃され給ふ。噫嘻。直義義博。彼れ何者ぞ。余史を閲じて。此に至る毎に。未だ嘗て凄然として。奉悼し。飲泣し

荏柄天神祠
忠久廣元頼朝の墓
胤長の宅趾
源二位の府趾
文覺の宅趾
葛西谷
鎌倉やつばの跡

て。而して卷を廢せずんば。あらざるなり。今來りて親しく其趾に詣る。感湧き情逼りて。亦涕隕ち心慚みて。言はんと欲して。言ふ能はざるなり。土窟は祠後の丘陵に在り。内の廣さは約そ疊八席可りなりと云。祠の左は荏柄天神祠。云ふ。北條義時。天野仁田の二人と比企義員を圖りし處なり。と。又其左には島津忠久の墓。次に大江廣元。次に頼朝の墓有り。而して三墳墓の前は。東南に和田平太胤長の邸趾。西北に源二位の府趾。又滑川を隔て。文覺の宅趾及び北條氏滅亡の地なる葛西谷。皆な麥秀黍離の感有り。鎌倉や兵どもの夢の跡。蕉翁が奥の平泉に遊びて。三代の榮耀一睡の中に。して國破れて。只だ山河在り。城春にして。草徒らに青みたりと云。ひけるは。特に此地の爲めに言ひける者か。と深く忍ばれぬ。此日午後六時三十分。大舟より乗車して歸らんと期す。大舟は此れより一里。而して此時已に四時を過ぎたり。乃ち匆々一過して。鶴ヶ岡祠の前を過ぎり

細朝高時

て右折す數町にして又一の巖道を得たり是れ元弘三年五月義貞が八州の豪傑を將ひて三道より鎌倉を攻めたるの時堀口貞満大島守之を致せし處即ち史に所謂見覆版なり抑も鎌倉は四塞天險の地故に夫の二位の府趾の若き壘なく溝なし而して二位は據りて以て子々たる流竄の餘りに奮ひ高時は擾々雲の如き十萬の衆を擁して而して亡ぶ鎌倉の三道攻を受けしとき見兵猶ほ十餘萬有りしと故に云嗚呼我れ嘗て李翱の賦に於て之を聞く曰く神堯以一旅取天下後世子孫不能以天下取河北と豚犬家を破る東西同歎なる哉坂を過ぐれば即ち建長寺北條時頼が宋僧大覺禪師諱道隆號蘭溪を待せし所東の外門は海東法窟西の外門は天下禪林の四字を額にし總門には巨福山山號を巨福と曰ひばなり皆な筆勢遒勁なり其總門なるは趙子昂他は朝鮮人竹西の書なりと云其山門は金碧の煌々赫灼たる者なしと雖も其構造の巨大な

豚犬、家を破る。東西同歎。建長寺第一、五山の

五山の第二圓覺寺

佛光禪師

三浦道寸の墓

管領屋敷

る。雕刻の瑰異高尙なる。誠に五山の第一刹と謂ふ可し又北に行くこと數町にして五山の第二刹瑞鹿山圓覺寺弘安の役後弘安五年十二月北條時宗の建立する所にして莊儼偉大並びに建長に亞ぐ開山は宋僧佛光禪師なり相傳ふ禪師徳祐の初亂を雁峯に避く元兵白刃をもて脅迫したれども禪師堅坐して動かず既にして宋亡ぶ乃ち慨然として東して我朝に航したる者なりと氣慨歛す可き哉境内に三浦道寸の墓有り一人有り之を見て余に問ふて曰く三浦通寸とは何人ぞと焉烏戊戌魯魚刺刺等の謬讀は古來免れざる所なりと雖も亦學者の宜しく心を注ぐべき所なり此二寺の間に管領屋敷と云ふもの有り是れ山内の上杉氏の邸趾なり知らずして過ぐ鎌倉北方の名勝舊跡は此に至りて盡きたり乃ち直行して大舟に至り瀛車に搭して歸京す時に午後八時十五分なり此日も亦雨に遭ひたれども皆な大雨に至らずして止み就中鶴

斯稿の作り方

夕岡以來は唯た憂りたるのみ此に於てか衆咸に我校萬歳を喚呼して各其途に就く抑も余の職校友會に於ては學藝部長たり則ち豈に徒爾なる可けんや因て聊か斯稿を作る若し夫れ其景勝の美神社佛閣の締構と古墳邸趾の由來等とは世人の業に已に知悉する所なれば拙文淺學余が如き者の妄りに襲ねて糊塗す可き者に非ず余故に或は敢て此れを記さずして或は議論を以て之を出し或は鑑戒に託して之を寫せし所有り讀者幸はくば諒せよ明治三十二年六月



遊嵐山記

其上 (春夢遊嵐山記)

嵐山は海内
の名勝と謂
ふ可し
嵐山の境

桂の川、澄然として澄徹し、委蛇として山に循ふて流れ、嵐の山、名櫻の嵐山、より移したる芳野、紅楓、翠りの松と相縫ふて流れに臨む、洛の嵐山の如きは意ふに海内の名勝と謂つ可き哉、蓋し其境たる山水相得て景勝皆な神有り而して名櫻、紅楓の其間を潤飾する微妙、艶麗にして瀟洒、脱俗、氣品甚だ高逸なり、我れ断じて以て尋常、觀花の地に非ずと爲す、歲の庚辰四月十日、予偶々病を養ふて彼地に在り、家人兩三輩を伴ふて遊ぶ、綺羅填咽して川の東西岸を通じて幾と立堆の地無し、東岸は酒肆、櫛比し西岸は即ち嵐山なり、其間に一橋を架す、所謂渡月橋也、時に已に午時、一亭に就きて飲む、亭は西に面し、正に嵐山と相對し、滿山の風光、軒を壓して

渡月橋

遊嵐山記 其上

見渡せば雪
か雲か

恰も好し花
方に十分

席に入る。見渡せば雪か雲か花候遅からず早からず瓊姿綽態嬌を競ひ
艶を闘はせ淡粧濃粉高低相承け山に倚りては巒翠松蒼と相錯し水
に臨みては漾々として清流に見はれ浴波鱗々として真幻相映する處
には三五の遊舫絃歌して遊弋賞觀し眞に一幅の活畫圖なり此に於て
意氣快然として連りに數大白を傾け醺然陶然として復た曠昔の鬱陶
の人に非す乃ち醉步躊躇衆を排して花下に至り厭賞して歸る爾後今
に五年融和駘蕩の候に至れば未だ嘗て再遊を思はざることあらず而
るに居常繁劇毎に以て憾みと爲す今茲四月東都に寓す事少しく間な
り亦遊ぶ所以を思ひ沈吟多時にして神魂恍惚たり忽焉子女各一人及
び一僕を随ひて復た前遊に登りし所の旗亭に就く三人は皆な前遊に
拉する所なり恰も好し花方に十分の輕盈に誇り山を繞り水を壓し
曳く者は白雲の如く曇なる者は濃霧の如く山光水色と相映發す而し

微雨の後

朝暎を享く
る處

出で、花間
を歩む

所感一則

て時會ま未だ朝を崇えず且つ微雨の後に屬し山は則ち一抹の淡烟名
残り留めて蒼翠拭ふが如く花は則ち片々裝を新にして楚々たる淡
裝の佳人が浴を出で椒房に坐するにさも似たり而して其朝暎を享
くるの處は玉露灼爍として萬花皆活き近きは語らんとする如く遠き
は招くかど疑はれ眺矚の佳なる風趣の雅なる前遊に優ること正しく
數等なるを覺ゆ出で花間を歩めば花房露重たげにして淡紅滴らん
と欲し芳露時に衣に點じて禽鳥樹間に囀む人をして杳然仙路の遠か
らざるを思はしむ嗟乎夫れ均しく嵐山なり其花や山や曾て曩年觀た
る所に異なるに非ざるなり特だ時異にして前には午前今は朝遇ふ所
同じからざれば前には雨なく今は雨後則ち其眺矚風趣斯くの如く相
變ずる者有り天下何物か然らざらんや徘徊之を久しくす已にして遊
人厯集し羅綺粉黛群を逐ひ隊を繼ぎ絡繹續紛として復た緩歩逍遙す

更に舟を繼

東風、一陣
萬花紛亂

目を放てば
萬人醉歌

果然南柯の
一夢

可からず乃ち亭に命じて酒肴を具ひて舟を繼す。舟或は中流に棹さし
或は汀際を上下して且つ酌み且つ眺む。景物觀を新にして櫻花山水と
皆な動き快絶言ふ可からざるなり。橋畔の茶棚數屋。我舟の遡るに隨ふ
て漸く縹緲として櫻花青松相繡錯するの間に隱見し瑤宮瑤閣の白雲
蒼巒中に在る如し。須臾にして東風一陣。颯然として山を衝き萬花搖動
して即ち飛舞紛亂し百千の胡蝶が一時に紛飛する如く頃々にして漸
く以て下り或は人の面を撲ち或は人の衣に着き杯酒も亦爲めに紅な
り此に於て遊興愈よ殷目を放てば芳雲匝匝の中に盞を洗ふて醉歌し
て相屬する者有り。翩々として舞ひ絃歌相競ふて歡呼する者有り。ゆく
ゆく吟ずる者。誰する者。拊腹する者。酒を戰はす者。千態萬狀なり。兒女等
狂喜に禁ひず舷を叩きて歌ふ。予も亦微吟低唱し玉山終に頽れて舟中
に偃す。時移り暮鐘耳を驚かすと覺えて眼を開けば夕陽窓を射て鐘聲

人情の感
憐む可し

果して吼々諦視すれば何ぞ圖らん身は依然東都の寓に在り嗚呼是れ
何爲る者ぞ豈に憂遊夢に吾神に入りしなるか我れ乃ち喪然として俄
に自失し遊思倍す切なり因て筆を抜きて之を記す。抑も物は固より眞
無く假なし焉ぞ知らん夢遊の眞遊にして眞遊の反つて夢遊に非ざる
無きを其未だ眞遊ならざるを知らざるに方りては怡然として自得し
一旦眞遊ならざるを知るに至れば則ち惟だに喪然として自失するの
みならず又其樂の孰れか優り孰れか劣れるを問ふに及ばず嗚呼是れ
人情の感なり而して今往古來獨り我のみに非ざるなり憐まざる可
ん哉我れ又附記して以て聊か自ら警む于時其月の十又一日

其下(初夏再遊記)

新緑蔭滯らかにして子規樹間に叫ぶ郊外遊賞の好季は豈に惟り櫻花
爛熳の候のみならん哉又豈に惟り秋葉渥丹の日のみならんや是の歳

初夏も亦遊
貧に佳

余は則ち一
大樽無能
可耻
總て俗遊を
為さず

初夏の嵐山

初夏遂に西遊し京の親朋海濶耕雲等を誘ふて復た嵐山に遊觀す聊か
夢遊嚙昔の憾を償ひ以て平昔緬々の懐を醫せんと欲するなり海濶等
は皆な風流文雅の士而して耕雲は別に笛を以て名有り一横笛を持ち
て至る余は則ち一大樽衆も亦各行厨を提ぐ相約して曰く宜しく地に
席して酌み以て大に天造地設の妙景を縱觀す可しと席を松蔭臨水の
地に下して班つ時に五月望日午下天氣清明にして山は嬋妍水は澄々
水聲耳を洗ひて松韻懐を清ましむ而して滿山の凝碧は葱々として人
を侵し衣を浸し老櫻稚櫻古松老楓と皆な鬱茂して相掩翳し間ま杜鵑
花有り灼々として血を吐き眼を照し宛も萬綠叢中の一照紅の觀を爲
す而して其松楓櫻樹は或は嫋々として路に垂れ或は蜿蜒として水に
延び間雅清逸皆な以て詩にす可く文にす可し其漸く進みて山勢漸く
出るの處に又一山脈有り嶮然として東岸に突起し兩山翠を競ふて疊

一部の清鼓
吹
一幅好山水
の圖

孤棹飄然と
して水に見
はる

綠萬丈而して水其間を流れ瀉々として素練の如く怪石臥し奇巖起ち
水紫紆清激奔放して積翠と相映發す嗚呼景斯に到る豈に復た此身の
塵寰に在るを知らん哉皆な覺えず叫びて曰く快快と是に於て酒を飲
み樂しきこと甚し耳を洗ふの水聲懐を清ましむるの松韻は便ち是れ
一部の清鼓吹と爲り山容水態の以て詩にす可く又文にす可きは便ち
是れ一幅好山水の圖と爲る信なる哉明友の會は以て歡を罄す可く山
水の勝は以て懷を暢ぶ可きや衆皆な耳熱して神旺膝を進め掌を鼓ち
懽然として相談笑す會ま孤棹飄然として翠を破りて水に見はれ搖々
として以て軽く下る乗客三五人有り蓋し保津川の杜鵑花を賞したる
者歟中に一客有り且つ眺め且つ飲みて歌ふて曰く

天爲我 又作景勝 滿引大酌豈可廢 請看山青水白景 真是平
安第一勝

願呼して座
に堪えず

と。聲林木に響き山鳴り水應ひて壯快言ふ可からず耕雲願眺して座に
堪えず急に起ちて笛を吹き徘徊逍遙す舟客も亦風流多藝の士なるか
又笛に應じて謠曲小督の一節を謠ふ

笛仕れと召し出されて馴れし雲井の月もかはらず人も問ひ來
て逢ひにあふその糸竹のよるの聲

と。謠聲笛聲一時喧騰す已にして舟過ぐ耕雲猶ほ罷めず忽にして急奏
忽にして緩奏涓流微かに響きて松濤悠揚し山高く水長きの趣有り海
濶稱嘆して措かず衆に謂て曰く果せる哉耕雲の笛に巧なる諸君盍ぞ
一言之を贊せざると余率爾に之に應じて曰く嗚々然又嫋々然潛蛟幽
壑に舞ひ嫠婦孤舟に泣かんと海濶笑ふて曰く子豈に以て坡仙赤壁の
洞簫と爲す乎と衆之れが爲めに絶倒し談論益す湧き日の山陰に暮つ
き嵐光漸く暗からんとするを知らざりき(明治二十九年作)

前身は是れ
子路の

三崎雜記

三崎の位地風光舊跡氣候 昨丙申之七月余病を獲て歸郷し翌八月寺
泊に浴潮す半月餘にして神氣日に快にして健康順に復す始めて浴
湖の大効有るを知るや今年も亦必ず往かんと欲す會ま六月以來輒
脚を思ふ當時淫雨連旬にして病勢日に加はる乃ち意を決して發せ
んとす但だ我輩は窮措大なり大磯鎌倉の如きは其地に非ず房州沿
岸の如きは恐らくば我徒填咽し而して或は痴生蕩子と室を同じく
せしめらるゝと有らん乃ち世人と其撰を異にして三崎に遊ぶ三崎
は東都人士の多くは未だ知らざる所友人玉玻等嘗て偶々遊ぶ今其
勸めに従ふなり相偕にする所は知人中村某君出雲の人なり時に七
月二十六日

城島孤燈夜似星。海南祠上照波青。千帆商船風濤裏。去望天光拂杳冥。

三崎の位地
地勢

とは是れ服部南郭が三崎を詠むたるの詩なり抑も此地は相州の最南端にして三浦郡に屬す戸數一千有餘其地形は環環出入して數多の小澳灣を爲す相隔つること數町にして南に一島峙ち其上に燈臺有り即ち南郭の詩に孤燈夜似星と云へる城島なり。斯島外洋の波濤を拒ぎ房の陸地又近く東南に突出し又大島有り其南に當るを以て海靜にして波躍らず激漚混濊たり東南を望めば富山、鋸山、其他房總の連山波濤の如く西南を眺むれば相模、洋、十八里、蒼波、洋々として芙蓉の屏顔縹緲として雲間に見はれ函嶺の諸山其下に踰躡し其風景一顧す可き者なきに非ず而して其地爲る源右大將の櫻の御所桃の御所梅の御所の三齋跡小田原氏の三崎城趾三浦道寸父子戰没の地

三崎の風光

三崎の舊跡

三崎の氣候

向井將監忠勝の墓等五六の探る可き舊跡なきに非ず且つ其氣候は夏清しく冬暖にして天候又晴多く土地乾燥也と云。一日土醫中島某が手記する所の三崎近況なる者を獲たり其中に曰く氣候は正午を以て之を率するに極寒二月は平均華氏五十度四五二三極暑八月は同じく平均八十一度九六七七是れ去る十四年より十六年に至る三年間の通候にして天候は大約一ヶ月間に晴十八日曇八日雨四日又風は烈風三日其餘は皆輕風輭風なり是れ同上十六年中實驗したる所なりと謂つ可し避暑避寒の適地浴湖養病の好處なりと惜むらくは屠沽客舍の此れに稱ふて佳且つ便なる者無きと字二町谷四五十間の地を除くの外は沙極めて少なく到る處の海濱巖石横露して甚だ浴湖を礙するとなり且つ其交通便ならず民俗狡黠にして氣力なく厭ふ可し

交通 東京より至るには二道有り。一は海路。火輪船、靈岸島の灣内漁船會社より發す其貨銀拾錢(但し今は二十錢。今ま當時のまゝ)を記す。下同之。一は陸路。鐵軌新橋より横須賀に達し横須賀以南は步輓車を借りざる可からず。此費計一回半餘。皆な五六時間にして達す。人其費の懸絶せるを以て多くは皆火輪船に託す。火輪船は毎日二回。午前七時及び九時とす。但し三崎よりは午後九時及び十時なり。火輪車は一日數回なれば。午前午後惟だ我意の欲する所。然れども三崎全町にして步輓車僅に一二輛あるのみなれば其歸路亦陸路に由らんと欲すれば横須賀に至るまでは徒行せざる可からずと豫期せざる可からず。而して其不便は惟だに此れのみならず其火輪船も實は魚介の運漕に供する者にして船内に客室なく不潔惡臭魚尊くして人卑しく魚多きときは客其席を奪はる。緋紳貴客の堪ふる所に非ず。東京間の交

通すら且つ然り況んや其外の土地をや此外は一も定期の通船なく又未だ電線の設有らず戸數一千有餘と稱し而して斯くの如きは何ぞや蓋し其地たる一の産物なき區々たる一漁落のみ而して又四方通路の外に僻在するを以てなり

風俗 抑も四方通路の外に僻在する者は其民俗必ず敦朴勤勉なる者なり而して此地の特に然らざるは蓋し以有り東鑑を按ずるに建久以來頼朝頼家頼經等が此地に遊びしこと一再に止まらず之を聞く城島は本と尉に作る。其城に作りしは頼朝の改むる所にして頼朝此地を以て四時遊息の處と爲さんと欲し諸國の守護地頭をして櫻桃椿の三樹を上らしめ各別ちて之を三所に植ひ其樹に因りて其名を命ず。櫻の御所桃の御所椿の御所即ち是れなりと。又北條五代記に云。永祿八年三月の初。氏康父子船にて小田原を發し來りて觀櫻の宴を

城島に開く。時方に櫻花爛發し海山の風光宛も錦繡機を脱する如く。君臣酣歌すること三日にして歸れりと此れに由りて之を觀れば願期以來は遊人屬集して其地久しく當時の大磯江の島たりしこと知る可し大凡大磯江の島の如く遊人屬集する處は民俗必ず狡賤にして氣力無し是れ豈に此地民俗の爾る所以の一端なること無からんや之を聞く此地の漁法は古より釣を専とす晚近人利巧に趨り各地の漁業各其盛を競ひ房の漁民百千群來し巨網をもて攫取す而るに此地の人は猶ほ舊株を守り屑々焉として綸を垂れ以て纒に其遺を拾ふ耳胥以て自ら困弊すと抑も人は窮すれば則ち濫す怪むを須るざるなり是れ亦此地民俗の敦朴ならざる所以の一端なること無からんや一日余一漁夫に問ふに其依然網を用ゐざる所以を以てし且つ謂つて曰く儻し一人の力之を辨ずる能はざる乎則ち何ぞ數人若

其二

舟子の狡辯

しくは全町社を結びて以て誓ふて房民を制することを期せざると。漁夫愁然として曰く貴説可は則ち可なり唯だ奈何せん我輩今は皆な困弊せり社は則ち結ぶ可し但だ能く之を支えて其利を見るに及ぶことを得るの力無し恐らくは反て巨失有らん寧ろ退きて依然釣に従ふの必ず多少獲ざると無きに如かざるなりと其困弊無氣力なると斯くの如し朽木は遂に彫る可からざる者歟余滯留中城島に遊ぶと四回其渡船賃定額半錢官榜儼在す而るに舟子余輩を見れば嘖ち以て之を知らずと爲し毎回必ず一錢を徴す甚だしきは則ち幾錢の錢貨を出すとも我にして苟も黙々に附せんか見ざる爲して其餘を返さず其狡賤概ねこの類なり信なる哉恒産無ければ斯に恒心なし憐む可きなり

三崎の地理
と名勝の所在

地理、名勝の所在地 三崎町は八ヶ町に分る曰く日之出町此れを三崎

寶藏山

遊々崎

海南祠

町の東端と爲す其背の丘陵は舊名は寶藏山今は北條に作る。小田原氏の改むる所と云。此れ上文に所謂三崎城の在りし所にして北條氏以前は三浦氏の據りし所なりと。曰く入船町曰く仲崎町曰く花暮町花暮町の對岸は即ち城ヶ島の遊々崎遊々崎は即ち頼朝の櫻の御所の在りし所當時は花時爛熳として人其花を觀て日の暮るゝを知らず故に此名有り。曰く海南祠南郭の時に云ふ海南祠は即ち此に在り此れ此地の總鎮にして無慮一千年の古祠なり祭神は大職冠藤原鎌足十一世の孫尙資朝臣の子資盈なりと此祠は實に天元五年の創建なりと。天元五年は圓融天皇の御宇今年を距ること九百十六年。資盈初め封を博多に得て九州を治む。後ち冤罪に陥り薩摩に遁れんとし。て海上颶風に遇ひ終に此地に至り寇賊を攘ひ土民を撫育す土民欽仰して歿後之を祀れるなりと云。地の開くる已に久しきを知る可し

向井兵庫頭の宅趾
最福寺の勝景

歌舞島

見桃寺

向井將監忠勝の墓

此れより而西は曰く西野町。曰く宮城町。曰く西濱町。宮城町に最福寺有り即ち向井兵庫頭の宅趾なり俗に之を兵庫屋敷と謂ふ。寺は丘上に在り隆然として以て高し。住僧崖に臨みて一小茅亭を營む遠近の全景皆な我雙眸に聚り月夜此に登臨すれば崖下の海上一波一月數十の月影波に隨ふて閃爍明滅し宛も娘捨山看月の觀有り蓋し此地第一の勝區西の濱町は此れを町の西端と爲す西の濱町の鄰は即ち字二町谷村今三崎町に合す其間に一小丘海岸に突起す歌舞島と曰ふ云ふ。頼朝が桃を植ひたる處と亦佳景なり相傳ふ安貞三年二月三浦の駿河前司伊豆の走湯山淨蓮房を請して此に說法せしめ海上に數船を泛べて歌舞の菩薩を移す故に此名有りと。二町谷に見桃寺有り是れ其れ或は桃の御所の舊趾か寺に向井將監忠勝の墓有り。忠勝は兵庫頭の子にして家康秀忠家光の三代に歴仕して海將と爲り數

ば功有り家光の時大船安宅丸を作りしは即ち此人なり。二町谷より西に一里餘にして小網代村亦三崎町に合す。即ち道寸父子戦歿の地にして其墓石有りと云ふ。中村氏切に一たび探討せんとを勸む余咲ふて曰く區々たる小英雄の跡我れゆくは反つて人をして我跡を訪はしめんと欲すと遂に之を辭す其實は虚勢にして暑を畏れてなり。日之出町の前は澳灣深く入る。北條の入江と曰ふ。其對岸は民家數十あり向ヶ崎と曰ふ。亦三崎の字内爲り大椿寺といふ有り。即ち頼朝椿の御所の舊趾なりと此れを此地地理の一般勝區舊跡所在の概と爲す。若し夫れ城ヶ島は眇たる一孤島遊ヶ崎の外は唯だ燈臺の傍の眺望。最福寺の亭に劣らざる者有るのみ然れども遊ヶ崎以東も亦島腹陸に面する處は往々斷崖十仞翠松横生して巖石其下に起伏し海潮之と戰ふて怒號噴白し亦一顧するに足る者有るなり。

遊賞 此地の遊事を舉ぐれば前記の勝區舊跡を探る。第一なり。舟を賃

して海中に釣る。第二なり。松輪村に遊ぶ。第三なり。松輪は同郡南下浦村に屬し此を距ること一里にして遠し寥々たる一海村。久留するに堪えざる處なりと雖も其地民家丘陵と相交錯し而して其丘陵は皆な高低起伏して稚松之れに滿ち其海濱は則ち白沙船々として松翠と相映じ止だに三崎の地の彎環屈曲して波靜なるのみならず其養痾浴湖に於ける彼に優ること決して萬々なり。丘上なる青松の中に松輪館なるもの有り客を宿せしむ海に臨みて風景爽朗にして房の鋸山と正に相對し右は則ち劍ヶ崎の燈臺。瑤宮の如く瑠閣の如く層翠疊緑の間に立つ。房賃一房三人に至るまでは一週間二圓以下。食費は各自の欲する所に因る。釣は舟及び篙夫一人にして其賃一日六十錢乃至八十錢なり。

旅舎、浴潮地、向々崎に森輪館なる者有り其家三面海に臨み、空氣清淨にして器具潔く百爾大に備はり客を待することも亦極めて殷なり此れを三崎第一の客舎兼割烹舗と爲す。客舎にして居沽を兼ね居沽にして客舎を兼ねるは僻他の常なり此外、日之出の青柳亭、入船の紀國樓、共に之れに亞ぐ者なり然れども此二家は皆な海を距るを以て他は之を知らざれども浴潮には決して不可、森輪に至りては北條の澳灣有り惜むらくば渡津の煩に勝えず且つ其海滋皆な巖石にして巖石又皆な無數の小貝殻を着け尤も浴潮に便ならず唯だ二町谷の歌舞島に接したる處を佳と爲す其他は最福寺の亭下の客舎○山某の屋下、貝殻なし然れども其家矮陋之れに加ふるに主婦跛にして而して妬悍、弊散として夫と相罵るの聲朝夕率ね兩三次なり之を要するに以て飲む可く宿す可き者有り而して浴潮するに佳なる者無し。

浴潮するに佳なる者有り而して宿す可き處なし是れ余が居沽客舎の之れに稱ふて佳且つ便なる者なしと曰ふ所以なり宿銀は一日三飯にて森輪館は六十錢其他は或は四十錢或は三十錢にして二十錢なる者も亦之れ有り云

街巷貨物、々價、此地は山海逼迫す是を以て其家概ね矮小にして厨に香蕪荷の儲なく厠も亦多くは尿管を分たず後戸又前街と後街と殆んど相犬牙緊接し甚だ下土に似ず而して其厠厨の相迫近するに至りては頗ぶる俗に云へる味噌糞一處の思有り宛然東都に所謂裏長屋街（はんていじやう）も亦之れに隨ふて狹隘にして車軌を方べて馳せ難し乃ち巷中（きやうちゆう）に至りては其幅纔に五六尺にして兩傍の人家衝然として相抵らんと欲す而して其中に米鹽酒菓の百肆列り南瓜の煮賣り店の如き人をして覺えず目を轉せしむる者有り就中西濱町は全坊幾んど

漁家なるを以て街上不潔にして膻氣人を咽ばしむるのみならず夏日は薄暮に至れば比屋途上に或は盥を居え或は据風呂を安じて恬として浴を取り賤内肥臀を搦がす有り尊郎便腹を撫する有り陋體見るに堪えず此地居民の業とする所は漁業大略其三の一なり商賈は則ち酒店煙艸舖船蕎麥の類最も多し無き所は骨董舖及び書肆なり唯だ新紙を賣る者一人有るのみ一戸と言はずして一人と言ふ者は行商なればなり地に雅人讀書子無きこと知る可し是れ畢竟其地の自から然らしむる者歟怪むに足る無きなり梨園遊由場等も亦之れ無し然れども娼樓は則ち五戸有り入船町の丘上に別に一區を成す遊娼母慮六十絃歌通宵此れ此地第一の繁華場なり但だ其樓其娼皆な何樓醜婦正に一場の醜貌展覽會飲食物にして得難き者は痔なり土人之れに代ふるに生姜若しくは菜服爛を以てす屠沽森輪館の

三崎の物價

如きに飲むに非ざれば得ず好軒者の一大恨事と謂ふ可し又鮪を蓋むること極めて稀なり鮪の稀なるに非ず地狭小にして終日にして一尾を鬻ぎ盡し難く之を鬻にするの稀なるを以ての故なりと物價は多くは東京よりも貴し其同じき者は鬻髮料烟艸の類のみ鶏卵の如きは其貴きこと實に二の一なり蓋し其地方多くは漁場にして農家少なければなり

三崎の言語

言語異俗歌謠 通俗はなす(談話する)をぬかすと云ふ此地は則ちふくと曰ふふく又之を首服の義に用ゆ曰く我尙不吹乎疾使舍弟吹之と舍弟とは人の弟を稱するの辭にして我とは汝なり又通俗にへたなことを爲ると云ふもの此地は則ちへたぐらしいと云ふことと曰ふ通俗に其山のすぐ下すぐ上又はすぐ隣りと云ふ其すぐを此地は皆なばつたりと曰ふ此れ此地の日用語の殊異なる者なり余の行旅

三崎の異俗

するや毎に頗ぶる其地の異風殊俗を聞かんと欲す今此地に遊び斯
 言語を聞くや宿痾禁ず可からず而れども人の就きて問ふ可き者な
 く深く以て遺憾と爲す或ひと云ふ斯地の娼妓古來土地の産若しく
 ば近邑の出多くして他郷より來れる者は僅に三の一に居り他と相
 反せりと其俗或は其れ多淫にして耻無きか嘗て之を俚諺に聞けり
 三浦岬ミナトササは女が夜這ひと然れども事下流に屬せり詳説す可からず三
 崎誌松尾左明著 寶曆六年東都御書肆心潮堂梓に云ふ城ヶ島の東西兩端にみな忌ヶ崎
 と稱する處有り往昔斯島の故事として神會舉行中は其年に喪有り
 し者は皆な家に在らしめず去つて此に來らしむ神會は十一月十一
 日是れ斯名有る所以なりと是れ異は則ち異然れども今や則ち亡か
 らん此外は終に聞きたる所なし唯だ見る浄土宗の于蘭盆會に其壁
 域に具燈を布きて之を清らかにし或は一基或は三四基大抵皆な照

三崎の歌謡

夜燈を建て、花燈に代ふるを又暮夜兒女が街上に謠ふを視るに五
 六必ず隊を成し調を齊ひて共に謠ふ其争ふ所有るや各其親む所に
 屬し兩群相齊調して嘈然として謠ひ互に其聲を極めて以て相壓せ
 んと欲し行者爲めに耳を塞ぐ亦一異風と謂ふ可し余や察俗の一端
 として盡く其謠を知らんと欲す而して歌意明ならず亦獲る無きに
 終りて獨り之れと其類を異にしたる者二を得たり其一に曰く食飯
 食魚イサ請復イサ活イサ請復イサ活イサと是れ童子兩三一小鱗の息將さに絶えんとする
 を環りて謠ふ所蓋し其復活を希ふの歌ならん又其一に曰く彼方山
 則日光照射ヒメツク何故此方不照射ヒメツク没久留ヒメツク没久留ヒメツク没久留ヒメツク没久留ヒメツク釋其帶ヒメツク隱之ヒメツク是
 れ童子が海濱にて天を眺め地を環ちて謠ふ所なり第三句以下は余
 其義を解せず然れども其漁夫晴天を祈るの歌たることは疑ふ可か
 らず嗚呼食は體を移して居は氣を移すと我れ斯童子に於ても亦之

を○見○る○明○治○三○十○年○十○月○稿○



游毛記行(追加)

停車坐愛楓
林晚

伊香保、榛
名、碓氷、様
妙義に遊ぶ

箕輪の城趾

嘗て杜樊川の句を聞く。曰く。停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花。紅葉の
人、を牽く。賊に斯くの如き者有り。矧んや其時寒からず。又暑からず。天高
く氣清くして尤も漫歩微吟するに適したるの候なるをや。遊子奔駒の
極めて促しきを念はざるに非ず。と雖も又冀はくば月を彌りて山川に
遊賞せん哉の思無きと能はず。斯に於て乎。上毛の遊有り。今茲十月中旬
往復三日を期し伊香保より榛名を経て碓氷妙義に遊ぶ。相借にせし者
二人。曰く霞外君。曰く竹田生。

十五日 味爽道に上る。残眠曹騰たり。上野停車場より火輪車を借りて
高崎に至る。北行すると半里にして飯塚。左折して行くと又二里許りに
して生原。箕輪城趾(城は一堆の丘にして高さ八十尺。回字形を成し濠郭

長野左京亮
業盛の墓

の迹猶ほ見る可しと云其西半里許りに在り天正十年瀧川一益が關東
管領として上州入國の時に先づ入りたる處にして今明治三十三年を
去ると三百七十四年前大永六年五月在原業平の後裔と稱する長野伊
豫守信業の始めて築く所其子信濃守業正其孫左京亮業盛に傳はり三
代四十年にして永祿六年(三百卅七年前)に至りて武田氏の爲めに陥る
相傳ふ業盛の墓近村井出の東徳寺に在りと云ふ銘に新稱院袁山法輪
大居士永祿六甲子年六月二十二日行年十八歳俗名長野左京亮業盛長
野十三代石塔立願主法如と有り也此行余先づ其墓に謁せんと欲す抑
も業盛父子等忠勇絶倫上杉管領に事ひて終始渝らず武田信玄西上州
を覬覦すること多年にして屢ば兵を加ふと雖も志を得ず永祿六年正
月乃ち大に兵を擧げて國中の諸城を劫略し終に箕輪を圍む時に業正
既に卒志(永祿四年)に卒業盛年甫めて十八歳百戰場を經たるの老將に

業盛父子の
忠勇

古今人終に
邪相及ばざる

行脚僧法如
の俠義

船入山の船
入の瀑

は終に敵す可くもあらず死を分として苦守したれども二月二十二日
城終に陥りて自殺す之を今の命を愛み妻子に率かれ白旗を掲げて
然たる者に比すれば天地響も皆ならず亦忠孝兩全の士と謂はざる
可けんや是れ余が先づ其墓に謁せんと欲する所以也城の陥るや信玄
内藤修理をして之を監せしむ行脚僧法如といふ者あり修理に謁して
業盛の死骸を乞ふて之を東徳寺に葬りたりといふ夫れ人は盛なれば
就き衰ふれば去る况んや亡びたる者に於てをや法如の如きは俠義と
稱せざる可けんや是れ亦余が先づ其墓に謁せんと欲する所以なり乃
ち百方之を搜索したれども其寺の有無すら且つ遂に確聞する所なし
遺憾鮮なからずと雖も終に思を絶ちて去る水澤村生原を距ると又二
里許り船入山村に傍ふて西北に聳ゆ瀑有り直下三十丈と號す所謂船
入の瀑とは是れ惜むらくは幅之れに細はず觀音有り邑の正位に當り

遊毛紀行

三人雨傘
大に雨に苦む

丘に倚りて設く。雕欄丹楹。靡麗なると儻稀なり。水澤觀音と云ふ高邊家成の三女伊香保姫の守護佛たりし者にして創立は天明年間。仁王門の頂格に墨繪の龍を畫けり。勢矯々として飛揚せんと欲す。狩野探雲の筆なり。午後五時に伊香保に達し木暮武太夫氏に投ず。此日朝來曇天。然るに霞外君雨具を齎さず。生原以後は雨漸く至り三人雨傘而して路多くは狹隘にして纒に一人を通ず可し。竹田生霞外君と時ならぬ相合傘の濡れごとを演じ龜歩牛行して辛くも水澤に至り此に始めて一傘を借り得たりしも榛名群山の夕風遠慮會釋なく倍す。横さまに雨を打ちつくる爲め右を望めば赤城の山高く峙ち廣く亘り其麓の田野千頃。林樾村舍故さらに按排を須えたる如く而して利根の河銀蛇の如く紆餘として其間に見ゆる景色よき高原の上を通りながらも面を向けん様なく此れが晴天で有つたならばと苦情の百萬陀羅如何です斯う降られ

赤城の山

木暮武太夫
氏樓上雨後の如望

てはやり切れぬ着館の上は特にうまい物を注文してビールと正宗とで一杯遣らふぢや無いか左様々々其れは無論ですともとは飛んだ弱蟲のお捕と謂ふ可きか澡浴數回し飽くまで飲み飽くまで食ふて臥す十六日早起して又一浴し歇牀に倚りて眺望すれば群峯蜿蜒として我前に相連り層巒疊々として我左に相複り隣する如く伏する如く相競ふて起つ如く列を亂して走る如く翠を疊み碧を凝す時に昨來の大兩始めて收まり蕪然たる白雲倏乎として奔り且つ繞り其狀宛も山と相争ふ如く素を展べ白を飛ばして紛々然濛々然たり而して山も亦肯て屈下せざらんと欲する如く翠之れが爲めに愈よ翠に碧之れが爲めに愈よ碧に千山萬岳忽ち隠るれども復た忽ち見はれ變化萬狀得て筆す可からず坐ろに拙堂翁の雲喩の趣ならざるを憶ひ景象の清奇なるを歎ずるなり午前九時に木暮氏を辭す待遇懇懃にして管廩奴婢三四

送りて門外に出で一人は猶ほ道びきて伊香保祠に至る凡そ伊香保の地たる全市皆な山に倚り高樓大厦層々として相疊なり街路一條磴に順りて層を逐ふて直上し伊香保祠其最高層に在り顧みれば夫の千山萬岳皆な指呼す可く近くは小野子山子持山遠くは赤城山二荒山時に雲陰概ね解け嵐氣略ぼ收淨し唯だ見る紺碧の大鷲瀟瀟割愛して祠背に降れば天地忽ち全く別伊香保第一の景勝噫我れ如何にして之を描寫し盡さん否な如何にして其髣髴だも之を寫さん四顧唯だ見る錦山繡峰の一大パノラマ祠前の景色と相反したる所尤も人をして其美を認めしむ所謂文の妙は轉の一字に在りとは亦斯理に外ならざる哉

曰く高嶺の鹿曰く猿澤の笠曰く物聞山の杜鵑曰く二つ岳の雪曰く何曰く何曰く何と此地も亦古來八景の選有り然れども名物に旨い物なし我れ終に此景の右に置く可き者を見ざるなり霜に飽きたる萬木の

黄くれなるあるは半ば黄半ば紅に爲りたるが森々としていやが上に生ひ茂り覆ひ曇り見る目まばゆき美しの光景深溪一道脚下を流るゝ彼方は所謂高嶺の鹿の名勝地危崖雲に入りて神祕鬼削すると数十丈全崖亦皆な紅を織り黄を綴る斯くて彎行すると二町許り一小橋溪に架するの處に及べば左のかた兩峯並び走りて一路其間に通ずる處譬へば五彩の色取りを爲したる大隧道の如く萬樹枝を交ひて窈として空を蔽ひ紅葉黄葉爛然洒然試みに其間を行かんか恍として錦繡の中を行く如く更に右のかた前路を望まんか對面の峯巒亦悉く是れ列錦鋪繡峻茂蒼鬱し風有りて掩弄し振動すれば紛紅駭黄杳然際なく人をして殆んど蒼仙に化したるの思有らしむ終に橋を過ぎて前路に就く盤礫すると半里許り双峰相並ぶ即ち二ツ岳山に蒸し風呂の設有り既ににして中の茶屋相馬山左に聳つ相馬山に次ぎてすらす岩奇甚しする

す岩より數町にして湖有り。榛名湖一に又伊香保沼と曰ふ。湖の東涯の一峯。東面して之を望めば宛然小富士。榛名富士又は伊香保富士と稱する者。湖の北岸に數峰。每峯に奇石附麗す。其尤も富士に近きを烏帽子岳と曰ひ。次は鬘櫛岳。次は硯掃部の二岳。安積良齋の記文を借りて之を記せんか。曰く。

溪迴路轉十五里。造天神嶺。仍是榛名山中。有湖。周廻三十里。水色沉碧。相傳靈物所蟠。早歲騰雨必驗。東岸一峰。逼宵岳。蓮曰小富士。北岸山高而偏。曰烏帽子岳。與烏帽並峙者。曰冠岳。西岸一峰立石。數丈相倚。類碧玉硯屏。曰硯岳。皆有草無樹。儼然天地一大名園也。予酷愛之。欲縱覽以攬其勝。乃循湖東行。過富士峰下。細草如剪。香無人迹。信意而步。湖水下注成渠。深淺不測。徒倚之間。見巨柳橫其上。乃扳援踰之。境益幽邃。山益清秀。相顧恍然。疑與世隔。徐觀以至烏帽子山下。有兩石筍。高十丈餘。屹然對峙。左右怪巖錯出。

若○怒○猊○相○噬○尤○爲○奇○觀○遂○繞○湖○一○周○復○抵○富○士○峯○下○忽○有○雲○氣○縷○々○生○峰○頂○諸○峰○相○繼○蓬○興○須○臾○瀾○漫○成○兜○羅○綿○世○界○咫○尺○不○辨○雨○隨○至○鬱○勃○神○骨○冷○々○然○如○御○風○躡○虛○而○無○所○依○

云々翁は榛名より此れを過ぎりし者。冠ヶ岳とは恐らくは鬘櫛岳ならん。此間道湖山の間を行く。湖は澄々焉。峰は蒼々焉。瀟々洒々として山水の相映發する。其光景の佳なる。四時固より然らざる莫し。矧んや今や紅葉の候。乃ち瀟洒に加ふるに。艶麗の二字を以てし。湖畔の樹々俯仰顔頭して。水に臨み山に傍ひ。具さに丹青の美を極め。風韻絶佳也。是れ恐らくは榛名山中第一の勝景。湖畔より登ると三町。即ち天神嶺なり。遠近の諸山。烟蕪雲樹の表に相圍す。降ると十八町にして。榛名。榛名は記す可き者。頗ぶる多し。而して最も奇とす可きは九折岩。尤も美とす可きは祠畔の紅葉なり。天神嶺上より降ると約そ十餘町にして。道左の一巖形。略ぼ瘦

洞岬の紅葉

狗の直立して首を昂げ口を開きたるに類し全巖數十の平面石を積みたる如く、巖々として以て百折して成れる者を九折岩と爲す紅葉堆裡清溪に臨みて立つ。此間峰巒皆な峭立し清溪其下に流れ山紅水明洞岬に至りて尤も佳観乎たる巨巖壁立すると千尺溪を壓して而して紅葉を被り而して黄葉而して残緑而して右も亦巨石磊々老杉千章盡々として山と高さを競ひ幽邃緘麗にして而も偉大誠に洞岬の巨觀たり之を過ぐれば即ち榛名洞締構壯大ならずと雖も華整觀るべく巨巖四周し其背に聳ゆる者特に傑立頭腹略ぼ備はり宛乎たる巨丈夫土人以て洞神の樞化したる者と爲し尊びて神影石と曰ふ旁洞の側に鐵の燈籠相傳ふ新田左中將の奉獻する所なりと榜して曰く元享二年二月十八日左近衛中將新田義貞奉納鐵燈籠と窟門を出づれば楓樹一株曆序楓と稱す一葉十二折閏歲には則ち十三と爲ると云萬年泉を過ぎて未だ

榛名洞

神影石

新田義貞奉獻の鐵燈籠

曆序楓

摩袖石

日月岩、脚岩

挂鞍岩

人事は兎角意地悪く廻るもの哉

朱欄橋に及ばざる處に峻巖疊立して重樓複閣の如きと相逼りて大石道を妨ぐ身を以て機に其間を過ぐ可し衣袂拘牽す摩袖石と曰ふ其他日月岩兩峰相對して双眉の如し獅岩首を昂げて爪を張り勢搏噬せんと欲す挂鞍岩溪に跨りて其狀馬背の鞍の如し凡そ一境松杉森々として溪水奔注し閑淨愛す可し三倉に至りて午餐し水沼中尾を經地藏峠を越る増田を過ぎ松井田に至りて宿す此日霞外君昨日の失敗に懲りて傘を購ふ而るに天反つて漸く霽る人世の事は兎角意地悪く廻るもの哉榛名を過ぎて以往も亦景勝なきに非ず地藏峠の景の如き最も愛す可し但だ盛饌に飽きたる後は更に箸を著くるに懶し因て今及ばず十七日亦晴る障戸を排すれば數峯の赭山塊然として軒に近づく即ち妙義山なり。昨天神嶺上に在りて之を望みしときは稜々たる其形一碧蒼々然今と相反せり蓋し昨は●●●●●山上よりせし者にして

事に臨むさ
きは思はざ
る可けんや

妙義山の奇
観

而して天氣快晴ならず今は則ち山下にして而して曙光の輝々たるを
受くるを以てなり受くる所の者に由りて其觀を異にし見る所の時と
處とに由りて其形を別にす事に臨むときは思はざる可けんや松井田
停車場より午前七時廿四分發の汽車にて碓氷に向ふ双軌弦の如く妙
義山を繞りて走りて景色甚だ妙なり妙義の山峻拔峭立虎牙竦壁志奇
巖怪石嶽岑嶺嶺嶺碗碗にして其狀譬へば大佛が跌坐して手に拂子
を執るが如き者有り譬へば巨牙を逆樹したる如き者有り又馬の双耳
を立てて嘶がんと欲する如き者有り亭榭小樓臺の如き者有り横川停
車場に至りて山尤も崔嵬にして眺尤も佳なり熊の平を過ぎて九時頃
輕井澤停車場に達す淺間山頂既に雪を被り淺間おろし關々として聲
を成す海拔三千五百尺の高原十月の半とて寒氣耐ふ可からず急に路
を問ふて舊輕井澤驛に趨る此れより來路に出づるの道に新舊二條有

碓氷峠町の
眺望

り新路は易なれども遠く舊路は難なれども近く且つ碓氷紅葉の美は
到底舊路を以て優れりと爲さざる可からずと聞きたるを以てなり十
町許りにして舊輕井澤驛々より登ると又十八町にして峠町碓氷峠の
絶頂にして上信兩州の境なり四望豁達にして勢川陸を盡し就中東南
一眺鴻蒙沆茫香として極まる所なし乃ち知る武尊吾嬬者邪の嘆有り
し者決して偶然に非ざるとを但だ千載の今日遺跡茫々其何の邊なり
しかを知る可からず憾特に深し而して又深く感ずる所有り嘗て有賀
長雄氏の著を讀みたるに曰く

吾國の地形たる東北より西南に延長せり而して西南は海を以て中
部と隔たり東北は山を以て隔たる中部に都し給ふ天子は賊に已む
を得ざるとながら其統治方は常に全國畫一の制を布くと難く不順
の徒有るときは西邊を恃まざれば必ず東に依れり中古の如き西に

太宰府有り東に鎮守府有り四國九州の如きは中部を距ると甚だ遠からず且つ航海の利有り特に天皇の起り給へる根本地方なるを以て外國無事の日は常に治平なりしも東北は碓氷函根の峻嶮有りて往來に便ならず且つ天孫人種の敵の巢窟とて王化の此に及ぶこと遅々是を以て所謂武士は關東より起りて遂に京都の文政を傾けた

碓氷峠と歴史

云々嗚呼是れ歴史に關する所鮮からざるの高山なり此地を過ぐる者は徒らに紅葉を賞す勿れ又徒らに武尊吾嬬者邪の跡たるに忍ぶと勿れ意ふに是れ天の南北を限れる我國自然の長江にして古列聖の常に以て憂と爲し給へたる所我輩たる者其れ深く思はざる可けんや佇望之を久しくして去る此れよりして路谷に傍ふて行く時代の變遷は直ちに道路の變遷と爲り昔は中山道の一驛路車軌を方べたりし大道今

碓氷峠の紅葉

ははや曾て其面影を留めず機は朽つるに委せ脚は茂るに任し纒に躰脚猫狗の徑を存するのみ一片の吊情なきを得ざるなり行くと二里許りにして脚尖急に俯し阪道兩三折余一鼓して先づ降れば忽ち見る一大巖石路の左りに當りて壁立すると數十尺喬木其下を繞り灌木其面に茂り丹碧淺深樹々繡を纂めて以て之を裝ひ一瞥甚だ觀る可きに似たるを抑も此山の紅葉は名東國に高しと雖も然れども新道の如きは開通日猶ほ淺く地膚未だ藓苔を著くるに及ばず鑿痕呈露し極めて沒風景なるを以て對面の峯巒紅葉多からざるに非ず且つ碓氷川の清流を帯びたるに似ず風韻甚だ鮮し舊路に至りても舊輕井澤驛以還は山となく谷と無く概ね灌木叢生し貞脆相雜ると雖も黯然たる其色紅黃皆な鮮明煥燦の致を歛き余甚だ慊焉たらざる者有り頗ぶる意を滿つるに切なりしを以て急に二子を喚びて相走りて其下に到れば意外意

外實に意外の美観壯觀巨巖音だに一二のみならず此れは唯だ其第一巖にして且つ其中の至小なる者のみ余覺えず叫んで曰くア、是れ確氷紅葉の名東國に噴々たる所以なるとなからん哉と凡そ其巖石は全一巖にして而して殆んど一町に亘れる者崩劣として亦皆な紅葉を被りて相連り其狀宛も大雲錦の屏を聯立したる如く而して其石罅の縦直なるを以てや過ぎて而して横さまに之を望めば宛も千百章の錦樹密生して天に向ふて行を爲す如し矧んや徑路此に至りて一轉し新道對面の峰巒の紅葉直ちに脚下に見はるのみならず其上より之を瞰るを以ての故に其眸中に朝する所の峰巒十百音ならず乃ち其紅葉たるや嘗て新道に於て見る能はざりし者に至るまで此れに在りては一眺遺無く擾々簇々として山に充ち谷に滿ち以て此大雲錦の屏と相掩映し鮮明煥燦滿目唯だ紅葉壯觀美觀實に意外の二字を冠せざるを得

ず霞外君喟然として歎じて曰く三日の遊賞此景を推して壓卷と爲さるを得ずと行く耽賞する間に偶ま火輪車有り松井田の方より至り錦雲堆裡に白雲を留めて徐ろに隧道中に没し去る正に是れ亂雲の鬱勃たる者亦一景と稱す可し終に阪本に降り横川を經妙義峰下を過ぎて歸京す抑も妙義は海内の名勝也此行本と必ず此に及ばんと欲す而して今ま然りし者は憾むらくば時既に午後四時に及びたるを以てなり明治三十二年十一月



15/5/40

明治三十三年七月廿七日印刷
明治三十三年八月一日發行

正價金貳拾錢

著作權
所有

著作者 金井助作

東京市神田區裏神保町一番地

發行者 長井庄吉

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿番地

印刷者 島保藏

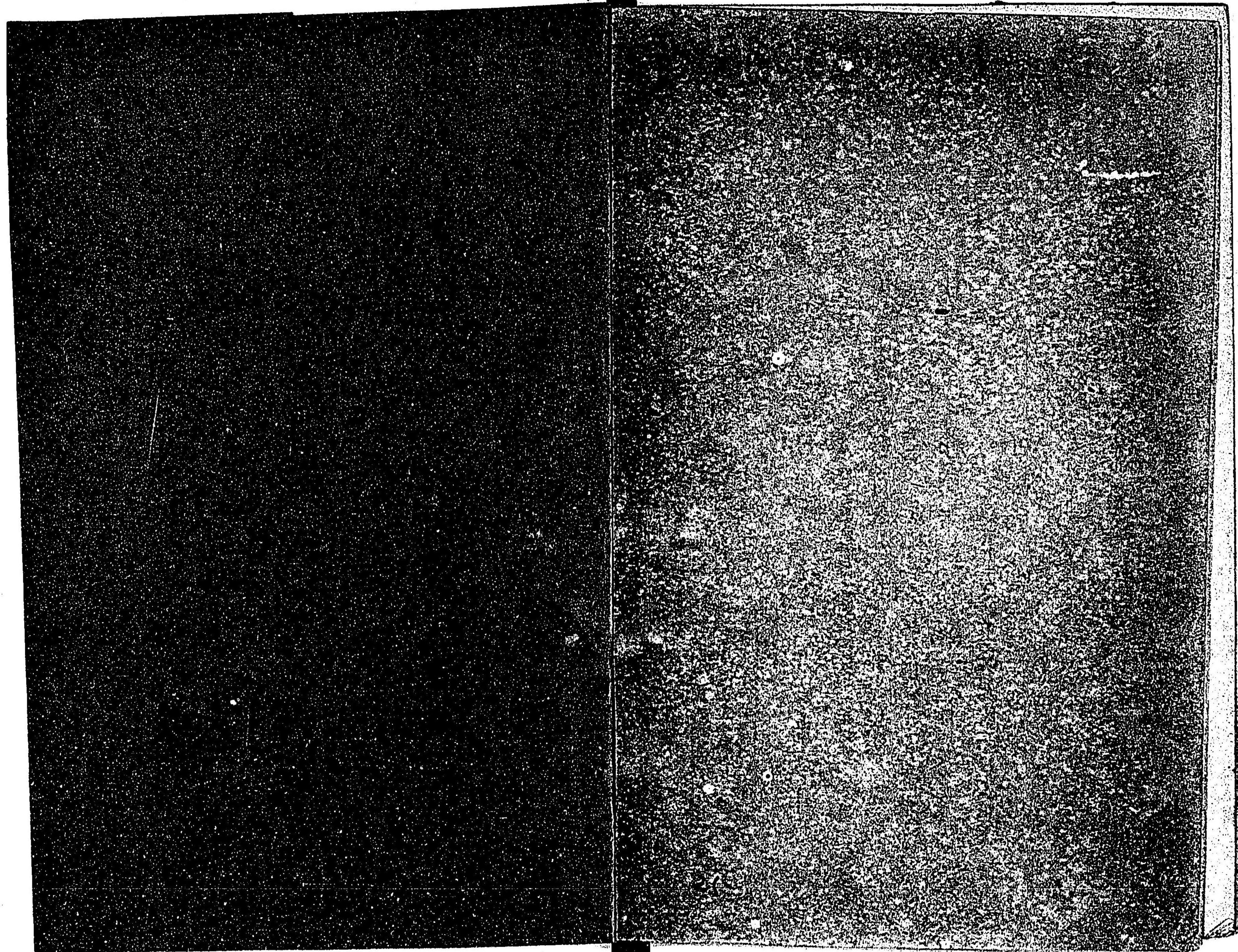
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十三番地

印刷所 秀英舍第一工場

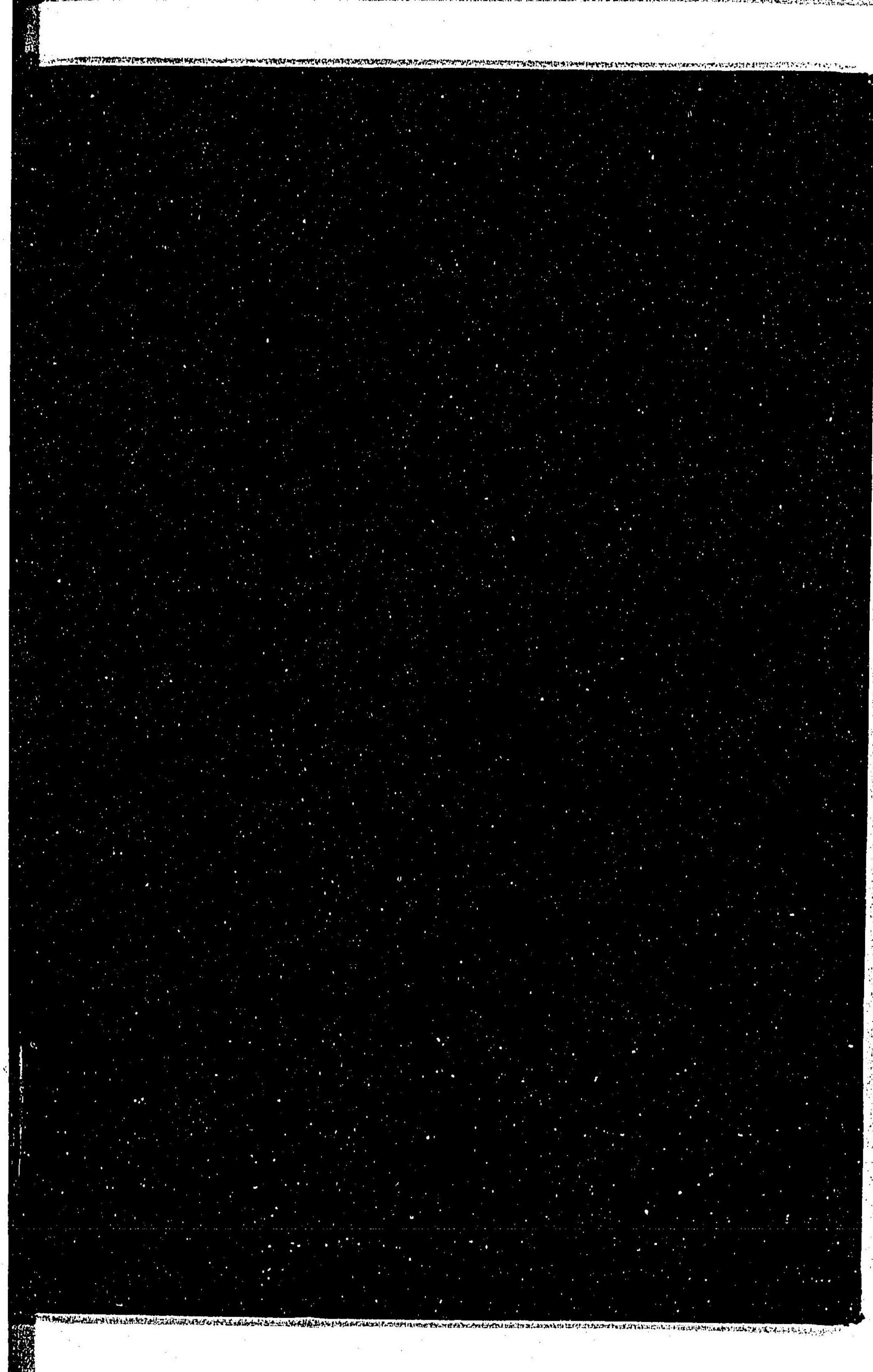
發兌元

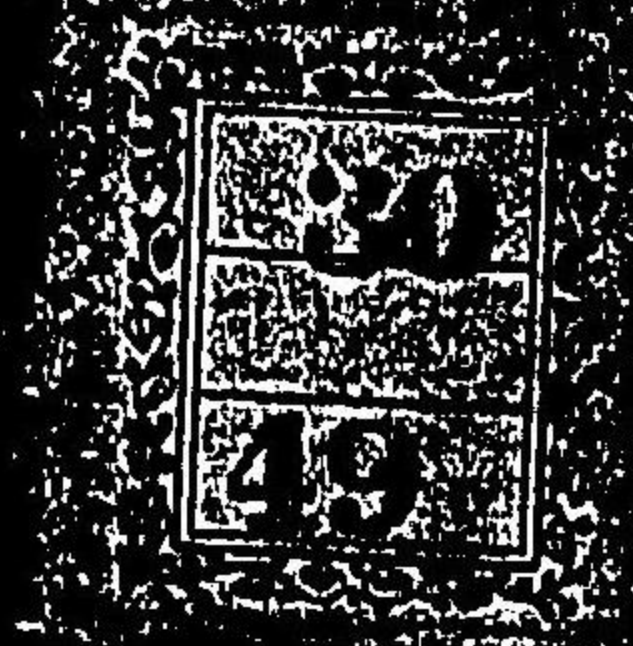
東京市神田區裏神保町

上田屋書舖



30
677





024348-000-1

30-49

名山勝水

金井 助作/著

M33

ADC-1525



